

S I D E B 第4回作品

「RECONQUISTA」

レコンキスタ

作・演出 クワハラ・ノ・チュースキー

【キャスト】 登場順

テカ  
タカ  
ヒカリ  
ネジメ  
ヨシヤ  
魔女  
新島民①  
新島民②  
島民①⑥⑩⑬  
島民④⑧  
農家  
豪族／貧農／奇人  
大君  
人足①  
人足②  
監督員  
カナシ  
カン  
侍従  
ジョフク  
オウモウ  
使者  
后  
島民①  
島民②  
島民③  
兵士①  
兵士③  
人足③  
マナ  
ウズメ  
タマテ  
ヤマト  
テンジ  
侍女  
兵士②  
兵士③  
護衛兵  
エマ  
ニュースキヤスター①／②／③  
研究員①

研究員②  
研究員③  
男①／男②／男③  
女①／女②／女③／女④  
ニュースキヤスター①／②／③

壮大なピアノのテーマ曲が流れてくる。空間を制圧するような、強く繊細な調べ。気が付くと、空間には7体の魂が現れ、不気味にゆれ動いている。その動きは深い悲しみをたたえている。7つの魂は徐々に絡まり合いうねりあう。魂はそれぞれ還る場所に刻まれていく。立ち上がる碑石。それは墓石になり、歴史を刻む痕跡になる。

魂① 「島があった」

魂② 「海は叫んでいた」

魂③ 「空は泣いていた」

魂④ 「大地は無言だった」

魂⑤ 「時は残酷だった」

魂⑥ 「月は揺れていた」

魂⑦ 「太陽は……」

暗転

※以降、巻物が流れていくような、本のページをめくっていくような流れていく場転のイメージ

○ある島。日本でいう古墳時代くらいの文明レベルの社会。

季節は春。テル、畑仕事に精を出している。

テル 「はあ 今年もおとうんめー、あんまーい いいい稲があく育ちますように、ああ島のお神様あ

く、お米の神様あ、大地の神様あく……♪ (的な歌)

鼻歌交じりに土づくりに一所懸命になっているテル。

息子と一緒に耕作に精を出しているのは、テルの母・タカ。

タカ 「ああ、なんて下手クソな歌なんだろうね。これじゃ神に祈るどころかあらゆる神に見放されちゃうよ。

テル！ やめなさい」

テル 「母にいく、怒られえく、はやあく23年♪ (的な歌)」

タカ 「ああ、もうやだねー。ほら、ご近所さんも困っているじゃないの(タカ、客席を指さす) ほんとすみませんね。」

テル 「(ラップ調に) ヘイ！ オレは農家！ 今を謳歌！ 畑耕しい、米を実らせえく、土にまみれて 生きるのさ♪ (的な歌)」

タカ 「あなたの歌を聞いて米が病気になるったらどうすんのよ？」

テル 「っていうか、そんなに怒ったら母ちゃんが病気になるって」

タカ 「余計なお世話だよ！ あたしはむしろ病気にでもなりたいよ。はーいつお呼びがかかるんだろうねー。恥ずかしいったらありやしない」

テル 「また愚痴だよ。グチグチブチブチ」

タカ 「またとはなんだい！ だいたいね、私が恥ずかしいのは自分の事だけじゃないんだよ。あんたが一年して嫁ももらわないから。ああ、嫁がこねーこねー」

テル 「一緒に土こねんなよ！ っていうかあんまり息子をいじめるとお迎えが遅れるよ」

タカ 「また、あんたはそんなこといって」

テル 「もう母ちゃん、さっさと仕事終わらせちまおうよ」

タカ 「何だい、あんた何かあるのかい？」

テル 「ちよっとねー」

タカ 「何？ 何かあるんだい？ ああ、さては」

テル 「バレた？」

タカ 「山のゲンさんに猪肉もらうとか？」

テル 「肉じゃなーい」

タカ 「浜のテツさんに、アジをもらうとか？」

テル 「アジじゃなーい。って、母ちゃん、食い物ばかりじゃん」

タカ 「ん？ 食い気じゃないってことは。ああ、あんたまさか」

テル 「そう！（メロディに合わせて・歌うように）今夜は満月！ 愛しい姫にやっと会える！ ああ、我が愛おしい人、彼女の名前はヒカリ。出会ったのはオレたちが6歳の時。そう、満月の夜だった。海沿いにたたずむその様子はまさにオレを照らす女神のようだった。彼女の黒い瞳とオレのくすんだまなこ  
が交わった時、運命が生まれてシャシャシャシャーンって海中の波が歓喜したんだよ！」

○島の海辺・夜。満月がテルとヒカリを照らしている。

海を見ているテル。息を切らしてヒカリが現れる。

ヒカリ 「テル、ごめんね。待った？」

テル 「もう一か月前からずっと待ってたよー」

ヒカリ 「そうじゃなくて。でも私もだよ」

テル 「何かあったの？」

ヒカリ 「うん。お父さんとちよっと喧嘩しちゃって」

テル 「お見合いしろって？」

ヒカリ 「うん」

テル 「また？」

ヒカリ 「俺が死ぬまでに孫を見せろって強引なのよ」

テル 「相手は？」

ヒカリ 「それは……」

テル 「気にすんなよ。どうせ、新島民の奴らだろ？」

ヒカリ 「うん」

× × ×

ヒカリの自宅。

ヒカリの父・ネジメがヒカリと激しく口論している。

ネジメ「ダメに決まっているだろ！」

ヒカリ「お父さん！テルはとってもいい人よ。優しいし、働きものだし、あんないい人いないもん」

ネジメ「身分が違うんだよ、身分が。我々は神に選ばれた一族なんだぞ。脈々と続くその血を汚してはならん」

ヒカリ「でも」

ネジメ「でも」はなしだ。「でも」なんて何の意味もない。「でも」を重ねてもあるのはただの否定だ。否定するだけの会話に肯定はない！ 肯定とは皇帝・エンペラー、つまり大君によって決められるのだ。すなわち、あるのは「でも」ではなくて、力、すなわち正当性なんだよ」

ヒカリ「何よ正当性って」

ネジメ「この島を治めるべき2大・正当性。我々は古来より神々に選ばれし民であることの正当性。そして、我が君を頂点とする新島民であることの正当性だ。だいたい……」

× × ×

テル「はーそうだよなー」

ヒカリ「安心して。ちゃんと断ってきたから」

ヒカリ「もう昔じゃないんだから。最近では旧島民と新島民の結婚だって結構あるし」

テル「でもなー、よりによってヒカリのお父さん、王国の要・泣く子も黙るネジメ様だもんなー」

ヒカリ「ごめんね、私があの人に生まれたばかりに」

テル「あー、オレが新島民の生まれだったらなー」

ヒカリ「テル」

テル「だってそうだろ。この島を仕切っているのは神に選ばれた人々、新島民の皆様。島を治め人々を正しい方向に従えていく超エリートさんたち。一方、昔からこの島に住んでいるオレたちは旧島民。畑を耕し、海に出て魚を取り、山に入り獣をとっては新島民の皆さまに「ははーっ」て捧げる。だから、オレも毎日毎日田畑を耕して新島民の皆さまの口に入る美味しいお米を作っているわけですよ」

ヒカリ「そんなこといわないで」

テル「でもな、んなことはどうでもいいんだ。オレはヒカリ、お前と一緒になれば何島民でもいいんだよ。

新島民でも旧島民でも、いや、10等でも100等でもいいんだ。なんならはずれだっていい。上島民でも下島民でも難民でも貧民でも眠眠でもなんでもいいんだよ。オレはヒカリに魅かれて、ヒカリに照らされたんだ！ なんならその光で干からびたっていい！」

ヒカリ「もうテルったら。私も何島民だっていい。だってこの島で生きているには変わらないもん」

その時、浜の方から不気味な音がする。

謎の声 「ううう、ううう」

ヒカリ 「何？」

テル 「追っ手か？」

ヒカリ 「きゃ、何、何か動いている！」

テル 「ひ、人だ！」

音がする方に歩いていくと、巨大な男・ヨシヤが倒れている。

ヨシヤ 「なん……なん……な……な……」

テル 「大丈夫ですか？ ヒカリ、手伝ってくれ」

ヒカリ 「どうする気？」

テル 「ここに置いておけないだろ、家に連れてかえるよ」

ヒカリ 「でも、この人変じゃない」

テル 「放っておけないだろ！ ヒカリ、手を貸してくれ」

テルとヒカリ、ヨシヤを抱えて家に連れて帰る。

○テルの家・居間。寝かされているヨシヤ。それを見守るテルとヒカリとタカ。

ヨシヤ 「呻いている」

ヒカリ 「凄じ熱」

テル 「ああ。ずっとブツブツ言っているけど、何いってるか全然わかんねーんだよ」

タカ 「テル、あんたねー。正体不明の大男なんか私は招待してないよ。家にあげて何かあったらどうするんだい？」

テル 「倒れている時点でもう何かあるって」

タカ 「あー、あたしは嫌ですよ、また面倒なことに巻き込まれるのは。ただでさえ、お呼びのかからないダメな母といつまでも独り身のバカ息子の家って言われてんのにこんな訳の分からない大男まで来たらまた噂になるじゃないか」

テル 「じゃあ、放っておけっていうのかよ」

ヒカリ 「テル、お母様は心配なさっているのよ」

タカ 「ヒカリ様。そのようなお言葉、恐れ多いです。このあんぼんたんのためにお手を煩わせてしまい」

テル 「母ちゃん！」

タカ 「テル、こちらはネジメ様のお嬢様だよ」

テル 「んなの、わかってるって」

その時、家の外から声がする。

女の声 「すみません！」  
タカ 「はい！ テル、あんた出てきな」  
テル 「わかったよ」

テル、外に出ていく。目の前にいたのは魔女達。

テル 「！（恐怖に怯える）」

魔女 「この辺りに、大きな男がいませんでしたか？」

テル 「……いやー、ちよつとみませんでしたよ」

魔女 「そうでしたか。失礼」

魔女達、去る。

タカ 「誰だったんだい？」

テル 「……魔女だ」

ヒカリ 「えっ！ 魔女が何で？」

テル 「大きな男を探しているって」

タカ 「いやだよー、この人のことじゃないのかい？ なんてことだよー、魔女が家にくるなんて。不吉だよ、

悪い知らせだよー。あんたがこんな男連れてくるから」

ヒカリ 「タカさん、落ち着いてください」

タカ 「魔女とは関わりたくないよ。ああ、恐ろしや恐ろしや」

○ヨシヤが見ている夢の風景。

2人の男と2人の女が楽しそうに話している。

## 4

○テルの家・居間。

テルに看病されているヨシヤ。ヨシヤ、目を覚ます。

ヨシヤ 「……ここは？」

テル 「あ！ 起きた？」

ヨシヤ 「？」

テル 「あんた、三日も眠りっぱなしだったよ」

ヨシヤ 「お前は？」

テル 「ああ、オレはテル」

ヨシヤ 「ここは？」

テル 「オレの家」



ヨシヤ 「家？　これが？」  
テル 「あ？　貧乏な家で悪かったね。あんた、大陸から来た人でしょ？」  
ヨシヤ 「……」  
テル 「まあ言わなくても分かってるよ。あんたみたいなでっかい人、この島にはいないからね」  
ヨシヤ 「いないのか？」  
テル 「ああ、いない。一人も」  
ヨシヤ 「……一人も……」  
テル 「名前は？」  
ヨシヤ 「……ヨシヤだ」  
テル 「珍しい名前だねー」  
ヨシヤ 「そうか」  
テル 「あんた、追われてるのかい？」  
ヨシヤ 「……違う」  
テル 「あ、あれでしょ？　船が座礁してこの島に流れてきたんでしょ」  
ヨシヤ 「……ああ」  
テル 「やっぱりねー。そうだと思ったんだよねー。たまにいるんだよ、そういう人」  
ヨシヤ 「……」  
テル 「どうした？」  
ヨシヤ 「教えてくれ。この島のことを」

### ○島の展望所・朝。

テルに連れられて、ヨシヤが山頂に登っている。

ヨシヤ 「息が切れている。まだなのか？」

テル 「もうすぐだよ。頑張って」

2人、山頂にたどり着く。

テル 「あ、ヨシヤさん、見えてきたよ」

ヨシヤ 「おお……」

テル 「ここなら島を一望できるからね。まずあっち、オレたちが暮らしているのは海から少し離れたあの集落。オレたち旧島民が多く住んでいる地域ね」

ヨシヤ 「旧島民？」

テル 「ああ、もうずっと昔からこの島に住んでいるのが旧島民。んで、その昔大陸から渡ってきた「神に選ばれた人たち」がこの島を治めている新島民。ほら、あの丘にある集落が新島民が住んでるところ」  
ヨシヤ 「大陸には渡れるのか？」

テル 「うーん、厳しいかも。あ、あそこ、向こうにうつすらと山がみえるだろ。昔、あの火山が噴火して地形が変化してから大陸に渡るのは難しくなったんだって。だから言いにくいんだけど、ヨシヤさん帰るの難しいかもよ」

ヨシヤ 「そうなのか」

テル 「たまに魔女達が船を出して何かしているみたいだけど」

ヨシヤ 「魔女？」

テル 「ああ、あそこに森があるだろ。あそこは魔女の森って呼ばれていてさ、「神様に見放された人たち」が住んでいるらしいんだ」

ヨシヤ 「あの森か？」

テル 「そうそう。それで魔女の森の隣にある岩がごっこつしている荒地があるだろ。あそこが「神々の領域」。

あそこに入ると不吉なことが起こるから絶対に入っちゃ駄目なんだよ」

ヨシヤ 「誰も立ち入らないのか」

テル 「当たり前じゃん。あそこに入ると子孫末代まで不幸が訪れるってずっと昔から言われてるんだ。魔女

達はあそこに入った罰で、「神様に見放されて」醜くなってしまったって」

ヨシヤ 「……」

テル 「そういうや、ヨシヤさんが寝ている間に魔女が大きな男を探しにきたんだけど、知り合い？」

ヨシヤ 「いや」

テル 「そりゃそうだよね」

ヨシヤ 「……テル、気になっていることがあるんだが」

テル 「何？」

ヨシヤ 「この島には老人がいないのか？」

テル 「ロージン？ 何、ロージンって」

ヨシヤ 「老人は、つまり、年寄り。爺さんとかばあさんとかそういう人達」

テル 「ジーサン、バーサン。何かの暗号？」

ヨシヤ 「あーつまり、長生きをしている人たちのことだ。80歳とか100歳とか」

テル 「はあ？ そんな人間いる訳ないじゃん。何、大陸にはそういう連中がいるの？」

ヨシヤ 「まあ、そこそこな」

テル 「何それ？ あ、もしかして神々の力が及んでないのかな？ もしかして可哀想なやつ？」

ヨシヤ 「神？ どういうことだ？」

テル 「え、知らねーの？ ここは神に選ばれた島なんだよ。んで、オレたちは神様からおよびがかかるんだ。

いいだろ？」

ヨシヤ 「何が？」

テル 「だからさー、偉大な者、優秀な者、善良な者、心清らかな者、戦いで命を落とすものは神様を選ばれて早く死ぬわけ。その逆でさ、ずっーと神様を選ばれないで、何十年もダラダラ生きながらえているっていうのは恥ずかしい訳よ。うちの母ちゃんなんて今日は思し召しがあるかもしれない、明日こそはあるかもしれないって毎日言ってる」

ヨシヤ 「タカさんは飛びぬけていうと長生きなのか？」

テル 「いや、母ちゃんの世代は意外とまだ生きてる人もいるよ。でも母ちゃんの自慢はさ、うちの先祖が30を待たずに死んでることなんだ。父さんだって25歳で呼びがかかっているからね。すごいっしょ」

ヨシヤ「そうなのか」

5

○テルの水田・昼。

田植えをしているテルとヨシヤ。

テル 「よっ、さっ、てい」

ヨシヤ 「(息が切れている) はあ…… はあ……」

テル 「あ、違う違う、まっすぐ植えないと。こうだよ、こう！」

ヨシヤ 「いや、まっすぐ植えてるが」

テル 「何いってんだよ！ 蛇行してるでしょ！ 蛇行！ ほら、あっちの子どもだってできてるんだから」

ヨシヤ 「じゃあ、一度抜いて」

テル 「抜かなくていいから！ もうそっちはいいから、先進めて、先、先、先！」

ヨシヤ 「あ、ああ。(足を畑に取られて) ああっ！」

ヨシヤ 畑で転倒して泥まみれになる。

テル 「もう、何やってんだよー はい、手貸して」

ヨシヤ 「すまない(手を伸ばす)」

テル 「ちよ、そんなに勢いよく引っ張ったら、ああっ！」

テルも一緒に畑で転倒する。

テル 「ひっぱりすぎたって！」

ヨシヤ 「すまない」

タカ 「コラッ、なーに遊んでんだい」

ヒカリ 「なんだか楽しそう」

テル 「違うって。ヨシヤさんが」

ヨシヤ 「すみません」

タカ 「はいはいはいはい！ そろそろお昼にしましょうかねー おにぎり握ってきたよ。ヒカリさまが

わざわざウメを持ってきてくださったんだよ」

ヒカリ 「ヨシヤさんが元気になればいいなと思って」

テル 「ヒカリ、ありがとう！ ヨシヤさん休も」

タカ 「お疲れ様。はい、どうぞ」

テル 「ああ、うまそう」

タカ 「ヨシヤさんもどうぞ」

ヨシヤ 「ありがとうございます」

タカ 「テル、あんたヨシヤさんに変な歌聞かせたんじゃないだろうね」

ヒカリ 「あんまり無理させちゃダメだよ。まだ病み上がりなんだから」

テル 「何だよそれ」  
ヨシヤ 「あれは歌だったんだな」  
テル 「ちよっと！ つていうかヨシヤさんが、田植えを手伝いたいつて」  
ヨシヤ 「役立たずで申し訳ない」  
テル 「いや、そんなことないって。ほら今日もこんなにはかどってるし」  
ヒカリ 「そ、そうですよ。こんなに稲を沢山植えてるじゃないですか！ このクネクネもなんかもう、大陸的  
つていうか豪快つていうか」  
ヨシヤ 「……植え直してくる」  
テル 「いいですつて！」  
タカ 「ヨシヤさん！ お米は実れば、実ればいいんですから！ さあ、食べてくださいねー」  
ヨシヤ 「ありがとう……（おにぎりを食べて）うっ！」  
テル 「母ちゃん！」  
タカ 「あたしや毒なんかいれてませんよ」  
ヨシヤ 「（心の底から勘当して）何てうまい米なんだ」  
タカ 「良かったー。昨年ここで取れたお米なんですよ。テル良かったね」  
テル 「ああ、この米褒められるのホントに嬉しい」  
ヒカリ 「テルのお米は島で一番だつて言われてるんです」  
ヨシヤ 「この米は、今まで食べた中で一番うまいと思う」  
タカ 「やっぱり味の分かる男は違うね」  
テル 「この米はさ、オレたちのご先祖様が開墾して開墾して苦労して作った畑から生まれたんだ。だから、  
この米はオレたちの魂の味つていっても過言じゃないんだよねー。まあ、うちの誇りつて言うか」  
ヒカリ 「言い伝えによると、テルのご先祖様はこの島ではじめて稲を作った人たちなんですつて」  
ヨシヤ 「そうなのか」  
テル 「そう。うちの先祖が神様に稲の種をもらったんだ。その種のお陰」  
ヨシヤ 「神様が……そうか、こんな味になるんだな」  
テル 「ヨシヤさん、何か感動してる？」  
ヒカリ 「ヨシヤさんつて、美味しいお米でも探してるんですか？」  
ヨシヤ 「何故？」  
ヒカリ 「わざわざ大陸からこの島に渡つてきて、毎日毎日島を歩き回っているから」  
ヨシヤ 「まあ」  
テル 「んでこの島のコト、気に入ってくれたんだよね」  
ヨシヤ 「ああ」  
テル 「ヨシヤさんさえ良かったら、うちにずっといてもいいからね。ねえ、母ちゃん」  
タカ 「まあ、お父ちゃんも死んで男手が足りないから、いてくれたら助かるけど」  
ヨシヤ 「それはまずいだろ」  
テル 「んなことないって。オレもさ、ヨシヤさんがいると一緒に仕事できるから楽しくてさ」  
ヒカリ 「テルは一人っ子だからお兄ちゃんが欲しかったんだよね」  
テル 「とにかく、うちにはいつまでいてもいいから。まあ貧乏な家だけどさ」  
タカ 「あ、新島民のお偉いさんだよ」  
テル 「まずい！ 隠れて！」

ヨシヤ、ヒカリ、土手の方に身を隠す。  
リンゴを食べながら歩いてくる新島民達。

新島民① 「ようテル、仕事してるか？」

テル 「はい。メチャメチャ精出してます」

新島民② 「お前泥まみれだぞ」

テル 「ええ、こうやってメチャメチャ泥をかき混ぜるといい土になるんで」

新島民① 「お前ネジメ様のお嬢様にちよっかい出してるっていうのは本当か？」

テル 「それは」

タカ 「いえいえ、そんな恐れ多いこと」

新島民② 「ああ、お前泥好きなんだよな？（畑にリンゴを投げて）とってこい」

テル、水田に入ってモノを取ってくる。

テル 「ど、どうぞ！」

新島民② 「誰が上がっていいといった！（テルを畑に蹴って落とす）」

新島民① 「あ、俺もリンゴ無くした。テル、探せ」

テル 「はい」

テル、水田に入ってモノを取ってくる。

テル 「こちらでよろしいでしょうか？」

新島民① 「泥だらけで食べないだろうが！（テルを畑に蹴って落とす）」

テル、水田で倒れる。助けようとするヒカリをヨシヤが止める。

新島民① 「お前には泥人形が目茶目茶お似合いだよ」

新島民② 「これ以上ネジメ様にご迷惑をかけるなよ」

新島民① 「こんなことしているとお前もお迎えが来なくなるぞ！」

新島民達、笑い声を響かせながらその場を去る。

ヒカリ 「テル、大丈夫？ ごめんね！ 私のせいで」

テル 「オレはいいんだ。オレは」

ヒカリ 「許せない。私、文句いつてくる！」

ヨシヤ 「やめろ」

ヒカリ 「だって……（泣き出してしまう）どうしてこうなるよの」

テル 「やっぱ、駄目なのかな？ あー、なんだろ。こういう時に神様が助けてくれたらって思うんだけど」  
タカ 「テル、もう諦めるんだよ。底なしの泥沼にはまる前に」

ヒカリ 「お母様」  
ヨシヤ 「テル」  
テル 「なんだよ」  
ヨシヤ 「新島民の人々は、旧島民の人々よりも財を持っているのか？」  
テル 「まあそうだね」  
ヨシヤ 「もしも、テルが新島民も驚くほどの富を貯えれば、ヒカリのお父さんは結婚を認めてくれるか？」  
ヒカリ 「テルが富豪になる？」  
テル 「オレが？」  
ヨシヤ 「そうだ、この地域一の富豪にだ。欲しいものは何でも手に入れられる。みんながお前のいうことを聞く。そんな富豪になったとしたらどうだろう？」  
ヒカリ 「お父さん、欲深いから意外と」  
テル 「考えてくれるかも」  
ヨシヤ 「よし。それでいこう」  
テル 「何？ どういうこと？」  
ヨシヤ 「テル、ヒカリ、俺に力を貸してくれ」  
ヒカリ 「何をするの？」  
ヨシヤ 「タカさん、お宅にある備蓄米を少し貸してはいただけないでしょうか？」  
タカ 「米？ まあきちんと返してくれればいいけど。あんた一体何やろうってんだい？」  
ヨシヤ 「……商売です」  
テル 「はあ？」

## 7

○いつの時代かわからない島

暗雲が立ち込める空、鳴り響く雷鳴、黙々と火山灰を吐き出す火山。  
その光景は世界が終わったかのよう。

男と女が呆然としながら島を散策している。

男、泣いている。

汗だくで木を伐採して船を作る男と女。

嵐の中、決死の覚悟で船を漕いで海を渡る男と女。

海岸に打ち上げられている男と女。それを助ける村人。

村人たちの死体を手に泣き崩れる男と女。

村人を率いて集落に兵を進める男と女。

× × ×

さらなる大軍を率いて、戦う、戦う、戦う男と女。壮大な軍事絵巻のような風景。  
 × × ×  
 家来の前で戴冠を受ける男。それを見つめる女。

○島のはずれ・テルたちが交換所の歌を歌っている。

テルの不安定な歌に合わせて、ヨシヤ、ヒカリが楽器を奏でる。(ちんどんや的な感じ)

テル 「持っていったら すぐ交換！」

肉も 野菜も お魚も

その場で交換 いつでも交換 あなたも交換 私も交換

交換しなきゃもつたいたい 交換しなきゃもつたいたい 交換しなきゃもつたいたい

さあ みんなで歌いましょう♪

タカ 「あの子ったら、畑仕事もしないであの居候と。一体、何やってるんだい！ すみません、下手なくそ歌で」

島民① 「なんかさ、うまい歌じゃないんだけど、耳に残るよね」

タカ 「えっ？」

島民② 「そうなのよ。もつたいたいって気になるわよね。いってみる？」

タカ 「ええっ？」

島民② 「交換しなきゃもつたいたい♪ 交換しなきゃもつたいたい♪ (口ずさみながらかけていく)

### ○島内・交換所

立ち寄った人々に説明しているヨシヤとカナン、ヒカリ。

テル 「はいはいはいはい、寄ってらっしゃい、みてらっしゃい、これもう、とにかくすごいですから！ (ヨシヤに) はい」

ヨシヤ「(必死に)皆さんの島生活を、劇的に素晴らしく、ビックリするくらい快適にしちゃいますからねー(テルに) はい」

テル 「皆さん、今までは収穫した農作物、水揚げした魚介類、撃ち取った獣肉、これ自分で毎回、取引にいらしてましたよね。重いし、遠いし、腐っちゃうし。交換してもらえないこともあるし、大変でしたよねー。(ヨシヤ) はい」

ヨシヤ「そ、そこで登場したのが、この「島の交換所」でございます！ ここに収穫物をもって来ていただければ、その場で欲しいモノに交換します！ 米、魚、肉、酒などなど欲しいモノにその場でなんでも交換しちゃいますー」

ヒカリ「えーでもー、選べる食べ物って古い奴じゃないですか？」

テル 「ご安心ください！ この保存庫、何と高床式になってまして通気性抜群！ 普段よりも長く貯蔵することができんです。もちろん、鮮度のいいものしかお出ししませんからご安心ください」

ヨシヤ「更に今お申込みいただきますと、もれなく、テルが作った島一番の美味しい米5合を差し上げます！」  
一同「おお！」  
ヒカリ「凄いいじゃない！　じゃあ、私のどんぐり、お願いします！」  
島民③「おお、おいどんのサツマイモもお願いするでござす！」  
島民④「あんだ、オラの干し柿もお願いすつがらない」  
島民⑤「あつしも！　混ぜてくだせー」  
ヨシヤ「押さないで押さないで」

○交換所・夕方。

ヨシヤ、テル、ヒカリが在庫を整理している。

テル「ヨシヤさん、すごかったね」  
ヒカリ「こんなにお客さんが来るなんて。ヨシヤさんスゴイ！」  
ヨシヤ「まだだ。もっともっと普及させないと爆発的な利益は望めない」  
テル「どういうこと？」

ヨシヤ「こういうものは電光石火で普及させないと成功しない。他が真似して新規で参入してくる前に島の隅々まで、島の流通を乗っ取る位この交換所を認知させるんだ」

テル「乗っ取るって物騒だねー」  
ヒカリ「それでどうするんですか？」  
ヨシヤ「テルだ」  
テル「オレ？」

9

○市内・噂話をしている島民達。

島民⑥「いやー交換所、便利じゃのお、わしは毎日通つとる」  
島民⑦「うちも聞いたで。最近の家財道具も扱いはってるんやで」  
島民⑧「そうそう、そこで世界の真実が書かれているっていう、不思議な石板を手に入れたんだよ」  
島民⑨「何それ、石板に何て書いてあったの？」  
島民⑧「大きく、「月刊　ムー」って書いてあったの」  
島民⑨「ここに来たのか、ムー！」  
島民⑥「あんたら知つとるか。あの交換所は、今日頼むと明日には家まで持ってきてくれるんよ」  
島民⑦「ほんかま？」  
島民⑥「そうなんよ！　「阿修羅のごとく真面目にゾーンって入って走ってくるから「あ・ま・ぞ・ん」っていうんじゃけ、タカさんところのテルが担いで来てくれるんよ。米ゆーたら重いじゃけホンに助かるねえ」

島民達、交換所の歌を歌う。その歌は波のように大きくなったり、小さくなったり、満ち引きを繰り返す。



## ○交換所・夏。

来る日も来る日もお客さんの対応に明け暮れるテルとヨシヤ

島民⑨ 「巨大スイカでも、大丈夫ですか？」

ヨシヤ 「元気に育ちましたね。何と交換なさいますか？」

島民⑩ 「おいテル、このカツオでもいいのが？」

テル 「あつ浜のテツさん、いいよいいよ。っっていうかカツオ大歓迎！」

ヨシヤ 「テル、配達を頼む！」

テル 「あいよ！」

× × ×

島民⑪ 「栗がよーけとれたさかい、うちに引き取りに来てもらえんかいな？」

ヨシヤ 「もちろんです。引き取りはいつにしましょう？」

島民⑫ 「オラはじめてだけど、このしいたげでもいいのがい？」

テル 「いい！ いい！ こんなおっきいシイタケ、この辺じゃないっすよ！」

× × ×

島民⑬ 「このブリ、うまかとよー。なあ干し柿と交換してくれんかねー」

テル 「もちろんっすよ・ブリは今人気なんですよ。かあさん、あまーい干し柿を」

タカ 「はいよー」

島民⑭ 「この猪肉でも酒と交換してくれんのが？」

ヒカリ 「うわー、猪肉は大歓迎ですよ。ヨシヤさん、まだお酒ありますよねー」

ヨシヤ 「もちろん、出来立ての美味しいの用意しますね」

島民⑭の娘 「お父ちゃん、はちみつもほしい」

島民⑭ 「ああ」

## ○春・交換所の倉庫。

ワイワイ、ガヤガヤと大盛況な交換所。またもや交換所の歌。その歌は明るく大きく不気味に響き渡る。

テルとヨシヤが倉庫で売り上げを確認している。

ヨシヤ 「よしっ、これがテルの取り分だ」

タカ 「ひえええっ」

テル 「うわー、まじで！ まじでこんなに貯まったの！ 毛皮、米、塩、酒に金！ なんでもあるじゃん」

ヒカリ 「たった一年でこれだけ貯まったの？」

ヨシヤ 「ああ、これが交換の差分で生まれた利益だ。モノを創り出す者よりも、それを運用する方が利益が出る」

タカ 「だから私は最初からヨシヤさんを信じていたんですよー いやーありがたやありがたや」

テル 「ヨシヤさんって神様みたいだな」  
タカ 「ヨシヤさん、もしよかったらずつーとウチにいてくださいね」  
ヨシヤ 「……」  
ヒカリ 「ヨシヤさん？」  
ヨシヤ 「テル、自信を持って。富は身分を超える。さあ、胸を張ってヒカリのお父さんにあってこい」  
テル 「は、はい！」

○神々の領域。

魔女がヨシヤを案内している。

魔女 「ヨシヤさん、ここです」

ヨシヤ 「ここが……」

魔女 「王女を慕う者どもが隙を見て運び出し、ここに埋葬したと」

ヨシヤ 「……マナ」

## 12

○テルの家・夜

客人たちが「テル、良かったな！」「ヒカリ、おめでと！」「タカさん！」等お祝いをしている。

テル 「本当になんて礼をいっていいか」

タカ 「ヨシヤさん、本当にありがとうございます」

ヒカリ 「ヨシヤさんのお陰で私達一緒にすることができました」

タカ 「こんな立派な家まで建てていただいて」

ヨシヤ 「役に立ってよかった」

テル 「ヨシヤさん、オレさ、今後のこと考えたらやっぱり」

ヨシヤ 「畑に戻りたいんだろ？」

テル 「何でばれたの？」

ヨシヤ 「テルは畑仕事の方が生き生きとしているからな」

テル 「ばれた？ いやーやっぱオレは畑を耕している方が性にあってるわ」

ヨシヤ 「交換所も規模が大きくなってきたので今後、人を雇って運営する。だからテルたちは畑に戻っても問題ない。もちろん出た利益はきちんと分配するから」

タカ 「ありがたやー、ありがたやー」

ヒカリ 「テル、ねえ。あれ」

テル 「そうだ。ヨシヤさん、どうしてもお願いしたいことがあるんだ」

ヨシヤ 「俺に？ 何だ」

テル 「もしさ、子供出来たらヨシヤさんに名前をつけて欲しいんだ」

ヨシヤ「俺が？」  
テル「そう。ヨシヤさんみたいに、頭が良くて勇気があって、立派な人になって欲しいからさ」  
ヨシヤ「俺でいいのか？」  
テル「ヨシヤさんじゃなきゃダメなんだよ」  
ヒカリ「ヨシヤさん、お願いします！」  
ヨシヤ「わかった。考えておく」  
テル「絶対の絶対。男の約束だよ」  
ヨシヤ「ああ。そうだ、俺からも話がある」  
テル「何？」  
ヨシヤ「俺はここから出ていこうと思う。これからは何かあれば交換所で会おう」  
テル「えっ、どこにいくんだい？」  
タカ「ずっといてくれていいんですよ」  
ヨシヤ「いや、新婚夫婦の邪魔にはなりたくないんで」  
ヒカリ「私達に気を使わないでください」  
ヨシヤ「長く世話になった。皆さん、ありがとう」  
テル「ヨシヤさん、オレに何かできることはないかな。何か助けてもらってばかりで」  
ヨシヤ「そうだな。信用できる漁師を紹介して欲しい」  
テル「お安い御用だ。浜のテツさんはどうかな？」  
タカ「あの人は口が牡蠣の殻位固い人だからいいと思うよ」  
ヨシヤ「それともう一つ。ヒカリのお父さんに会いたいんだが」  
ヒカリ「私のお父さんに？」

## 13

○いつの時代かわからない島。緑があふれ穏やかな風景が広がっている。

女が目に飛び込んでくる風景に驚きながら歩いている。  
その先には足を怪我した少女。助けてあげる女。  
× × ×  
女、島民たちに稲作を教えている。畑に種をまく女。  
× × ×  
集落の皆で収穫を祝う女。  
× × ×  
宮殿。噂を聞きつけた島の王に謁見する女。稲を献上する。  
× × ×  
王の子どもを身ごもる女。  
× × ×  
王亡きあと、女王になる女。

## 14

○交換所

様々な人々が収穫物を持ち込み貨幣に変えている。(音楽と歌で見せる)

農家 「畑でとれた、この大根もー。貨幣に♪」

漁師 「朝釣り上げた、このカツオもー。貨幣に♪」

猟師 「今日撃ち取った、この猪もー。貨幣に♪」

織物師 「時間をかけておりあげた、麻織物もー。貨幣に♪」

豪族 「家に代々伝わった、この勾玉もー。貨幣に♪」

貧農 「耕していない、荒れた土地もー。貨幣に♪」

奇人 「夢もー、人生もー、思い出もー、個人情報もー、貨幣に♪」

全員 「何でもー、かんでもー、いつでもー、いつでもー、貨幣に変えよ。貨幣に変えよ。変えられるものは貨幣に変えよ。

変えれば変えるほど、みんなが幸せに。みんなが豊かに。島が明るくなる。さあ、変えるのだ、変えるのだ、貨幣に貨幣に。貨幣貨幣貨幣貨幣貨幣貨幣貨幣貨幣貨幣」

### ○ネジメの屋敷。

ヨシヤ、毛皮や金などをネジメに献上している。

ヨシヤ「ネジメ様。ご配慮ありがとうございました。こちらをお納めください」

ネジメ「これだけの金を！ ヨシヤと言ったな。お主、何が望みだ」

ヨシヤ「拝謁をお許しただけじゃないでしょうか」

ネジメ「何、拝謁だと？」

## 15

### ○テルの畑・夏。

テル・タカ・ヒカリの3人で畑仕事をしている。(用水路の水がちよろちよろ流れている。)

タカ 「いやー、しかし凄いなもんだねー。この貨幣があれば何でも手に入るんだもんねー」

テツ 「ヨシヤさん、浜のテツさんと相談してこの貝作ったらしいよ。品種改良っていったけどこんなきれいな貝みたことないもんね」

ヒカリ 「ヨシヤさん、貨幣を島のすみずみまで使えるようにお父さんをお願いしたんだって」

タカ 「そういえば、山のゲンさんがさ、猟師やめて土地を貨幣に変えたんだって」

テル 「何？ 土地まで貨幣になるの？」

タカ 「そうらしいよ。貨幣欲しさに山の民はドンドン土地を手放しているってさ」

テル 「それまじやないの？」

ヒカリ 「結構問題になっているみたいで、山を捨てた山の民が街にあふれているんだって」

テル 「ご先祖様が守ってきた土地を手放した罰だな、きっと」

タカ 「んー！」

テル 「母ちゃん、どうしたの？ 疲れた？」

タカ 「わたしやまだ疲れちゃいないよ。だいたい、はじまってまだ30分しか経ってないじゃないか。そうじゃなくて、見てみなよ」

ヒカリ 「ん！？ あっ！」

テル 「用水路に水がない！」

○宮廷内。

ネジメ 「……大君、ヨシヤを連れて参りました」

大君 「通せ」

ヨシヤ 「お初にお目にかかります。この度は……」

○用水路を辿って山を登っていく3人。

タカ 「ちよつと見てごらんよ」

ヒカリ 「ここも水が止まってる！」

テル 「やっぱりおかしい。もっと上流まで行ってみよう」

○宮廷内。

大君 「ヨシヤとやら……よかろう」

ヨシヤ 「ありがたき幸せ」

ネジメ 「大君、よろしいのですか」

16

○山奥・山の民の土地。

沢山の人足達が川を堰き止める作業をしている。石や水の音、そして人足達の声が山に鳴り響いている。

人足達 「えっちら、おっちら、えいや、おいさー、川を止める。せい、せい、せい、せい、川を止める」

タカ 「あいっら、川を堰き止めてるじゃないか！」

ヒカリ 「これが原因ね！ あ、テル！」

テル 「おい、あんたら何やってんだよ！ んなことしたら水が流れてこねーよ」

人足① 「おい、兄ちゃん。仕事の邪魔すんなよ！」

テル 「何で勝手に水を止めたりしてんだよ！」

人足② 「うるせーな、こっちは困ってねーよ」

ヒカリ 「突然すみません。私達ずっと下流で畑をしているんですがうちの畑に水が来なくて」

監督員 「何をやってる。作業を止めるな！」

人足① 「監督。あいつらがいいがかりをつけてくるんすよ」

テル 「お前らがこんなことすからだろ」

監督員 「何ですか、あなたたちは？」

テル 「こんなことされたら川の下流の人たちが困るでしょ」

タカ 「飲み水や洗濯、畑に引く水だって全部川の水使ってるんすよ」

監督員 「この土地は所有者のもんです。持っているものが何をしようがそれは持つていてるものの勝手というもの。下流の人間が困ろうがそれは下流にいる人間の問題です。それが嫌なら下流から離れなさい」

テル 「下流にいるってのは理由があるから下流にいるんだよ。それを全部無視して下流から離れるって、

あんたの話は随分横暴だよ」

監督員 「あなた達と話しても平行線です」

タカ 「平行でもいいんですよ。意見が交わらなくてもいいですから、ここからまっすぐに、だあーって下流に川に水を流してくださいよ」

監督員 「ご安心ください。あなたと私達の意見は交わります。これから別の流れを作って川に水を戻します」

テル 「そうなの」

ヒカリ 「なんだ、取り越し苦労でしたね」

タカ 「それなら最初からそう言ってくれば」

監督員 「今後、川の水を利用したい方は、この土地の所有者に貨幣を収めていただくことになります」

テル 「どういうことだよ？」

監督員 「言葉通りです。何のひねりもない。いや、ひねっても何もでない。ひねったら 出ると思ふな、旨い水」

テル 「おちよくってんのか」

監督員 「かみ砕いて説明したまでのこと。つまり水を利用したければ貨幣をお支払いただきます」

タカ 「何いってんだい。水はこの島みんなのものだよ」

監督員 「水資源 皆のものです これ幻想」

タカ 「うるさいよ！」

テル 「お前な。こんなこと、大君が許すはずねーだろ」

監督員 「大君は了承しています」

ヒカリ 「大君が？」

テル 「誰なんだよ、こんな汚ねーことしてるやつは！」

タカ 「この辺りは山の民のものだろう？ あいつらかい？」

監督員 「いえ、この土地は山の民が売却しています」

テル 「じゃあ誰なんだよ。そいつは。島民として恥ずかしくないのかって言うてる」

監督員 「島民ではありません」

テル 「島民じゃない？」

ヒカリ 「じゃあ、誰が」

テル 「まさか……」

○テルの家

ヒカリ 「お帰り。ヨシヤさん見つかった」

テル 「駄目だ。どこにもいない」

ヒカリ 「お父様に確認したら、やはり大君は……。水を有料にする代わりに莫大な貨幣を王国に提供するって」

タカ 「その許可を頂いたのが」

ヒカリ 「ええ。ヨシヤさんだと」

テル 「信じらんねーよ」

タカ 「そうだよ、私達をあんなに助けてくれたのに」

ヒカリ 「……気になる噂を聞きました」

タカ 「何だい？」

ヒカリ 「ヨシヤさんを見た人がいるんです」

テル 「どこで？」

ヒカリ 「神々の領域」で」

テル 「なんだって！」

タカ 「何だってあんなところに」

ヒカリ 「しかも、ヨシヤさんと一緒にいたのは魔女だったそうです」

テル 「魔女と！」

タカ 「魔女と何を？」

ヒカリ 「わかりません。でも噂では、何か悪いことをしているんじゃないかって」

テル 「ヨシヤさん……この島で何をしようっていうんだ」

17

○ある大陸・城のテラス。

カナン王と后が眼下に広がる民衆たちに向かって手を振っている。

民衆達 「カナン王万歳！ カナン王万歳！ カナン王万歳！」

延々と響き渡る王への熱い歓声。

○城内・王の間。

疲れているカナン王とそれを介抱する側近たち。

侍従 「建国記念日にこれだけの民衆が城に集まってくるとは」

后 「さすが大王様。カナン王の威厳は王国中に鳴り響いておりましようぞ」

カナン 「いやー、疲れたのう。立ってるだけで腰がいたいわい」

そこに、カナンの長男・カンと側近・オウモウ、次男のシンと側近・ジョフクを連れてやってくる。

カン 「父上、戻ってまいりました」

カナン 「おーおー来たか。久しぶりじゃの」

シン 「母上、ご無沙汰しております」

后 「カン、シン。二人ともよく戻りました」

カナン 「カン、オウモウ、どうじゃ西は」

カン 「は。周辺民族も我が王国への恭順を誓っております」

オウモウ 「カン様はよく西方を治められております」

カナン 「そうかそうか。シン、ジョフク、東はどうじゃ」

シン 「我が王国が築いた繁栄を民一同、日々享受しております」

ジョフク 「すべてはカン王のおかげだと」

カナン 「そうか。東方も安心じゃな」

カン 「父上、お話しとは」

カナン 「実はな2人を呼んだのは外でもない。この王国の先の話じゃ」

后 「大切な話です。しかと聞きなさい。あなた方も」

側近達 「はっ！」

カナン 「ワシがこの王国を建国してから40年が経った。徐々に勢力を拡大して今ではこの大陸を統治するまでの強国となった」

カン 「存じております」

カナン 「だが、わしももう年じゃ。恐らくもう長くはないだろう」

シン 「父上、何を弱気な」

カナン 「自分のことは自分が一番わかっている。長年苦楽を共にしてきた、エマも先日亡くなった」

后 「エマ將軍の件は大変残念でした」

侍従 「我が王国、最古参の忠臣。不死身の軍神・エマ將軍は我が軍を何度も勝利に導いてくださいました」

カナン 「そうじゃ。エマはわしの守り神じゃった。それがいなくなった今、わしももう」

ジョフク 「王、何をおっしゃいますか？ この国はカン王あってでございます」

オウモウ 「しかし、エマ將軍を失われた悲しみはさぞお深いかと」

カナン 「息子たちよ、よく聞け。ワシが死んだら、この国はお主たち2人が力を合わせて統治せよ」

カン 「2人でですか？」

カナン 「そうじゃ」

シン 「しかし、王が2人というのは」

后 「これは大王が思慮に思慮を重ねたご判断なのです」

カナン 「この王国はワシの夢だ。民が豊かに幸せに暮らせる世界を目指した結果がこれじゃ。この世界が失ったものをもう一度取り戻す、その一心でワシはエマと共に人生をこの王国に注いだ」

侍従 「大王は寝る間も惜しんで国作りに取り組んでこられました」

カナン 「民たちもわしを信じて長年ついてきてくれた」

カン 「よく存じております」



カナン 「いいか息子たちよ、この王国は我が王族が私欲を肥やすものではないぞ。民たちが安全に暮らせる国土を守り、民たちが明日を信じて生きていけるような世を作ること、これが我が一族の使命。よいか、お前たちは、2人で力を合わせてこの国を治めるのだ」

カン 「父上のお気持ちよくわかりました」

シン 「父上のご意思に従います」

カナン 「うむ。それともう一つ。海を渡ってワシを探しに来る人間が現れたら、その者を丁重にこの国に迎え入れて欲しいのじゃ」

カン 「その者は一体？」

カナン 「ワシの友人じゃ」

シン 「父上のご友人とは。どこかの王族でございますか」

カナン 「まあ、そんなところじゃ」

シン 「それは一体いつ？」

カナン 「わからん。もしかしたらお主たちが死んだあともしれん。だがきつとくる。だから子孫に代々このことを伝え残して欲しい」

シン 「いつの時代であっても、カナン王を訪ねてくる者を丁重に迎え入れよと」

カナン 「そうじゃ。その者たちが来るまで決してこの王国を衰退させてはならぬぞ」

后 「ホホホ、大王様。それではまるでその方のために王国があるように聞こえますわ」

カナン 「そのようなことはない。話は以上じゃ。皆の者もわかったな」

全員 「はい」

カナン 「皆の者下がれ」

全員 「は」

カナン 「シン、お前は残れ」

カン 「えっ」

シン 「は」

シン、カナン以外退出。

シン 「父上、わたくしに何か？」

カナン 「東方の、海を越えた先に島があるのは知っておるな」

シン 「行ったことはないですがそのような噂は聞いたことがあります」

カナン 「よいか。その島には何人たりとも決して渡ってはならん」

シン 「なぜでございますか？」

カナン 「あの島は呪われておるのだ。だから決して近づいてはならぬ。よいな」

シン 「は。かの島への航海がないよう、嚴重に港を警護します」

カナン 「頼むぞ。それともう一つ。お前に渡したいものがある。これだ」

シン 「これは、見たことない文字ですが？」

カナン 「エスペラント語じゃ」

シン 「エスペラント……聞いたことのない言葉です」

カナン 「ああ、恐らくこの世界にエスペラント語を理解する者はおらんじやろう。あの2人を除いて」  
シン 「これはどうすればよろしいのですか？」

カナン 「海を越えてわしを訪ねてきたものに渡して欲しい」  
シン 「その者の名を教えてください」  
カナン 「名は……」

○宮廷内。

オウモウ・ジョフク・侍従 「カナン王、御崩御！」

国中に響き渡る悲痛な叫び。

18

○東方・シンの城。

シンとジョフクがこれからの打合せをしている。

ジョフク 「シン様。大王様の葬儀の件でございますが」

シン 「ああ、これから兄と会って相談しようと思う」

使者 「申し上げます！ カン様拳兵！」

シン 「兄が？」

ジョフク 「何だ。西方に異変があったのか？」

使者 「それが、進軍先はこの城とのこと！」

シン 「何だと！」

ジョフク 「詳しく話せ」

使者 「は！ カン様の陣営では「帝位に目がくらみ大王を葬った裏切者シンを討ち果たすべし」と東方に号令をかけているとのことですよ」

シン 「おのれ兄上。凶ったな！」

ジョフク 「カン様は大王様の遺言を反故にして、おひとりでの王国を治めるつもりなのでしょう」

使者 「カン様の兵力は10万とも20万ともいわれております」

シン 「ジョフク、私はどうすればいい？」

ジョフク 「貴方様は大王君の後継者。共同統治を反故にするカン様こそ、謀反人。こちらにも兵を集め迎え撃つべきですよ」

シン 「わかった」

ジョフク 「幸いなことに、我々の方が宮殿に近いです。まずは王妃様をこちらに囲い込んで我らの正統性を王国にしらしましょう」

シン 「そうだな。逆賊なのは兄の方。皆の者、戦の準備を！」

19

○ある平地・会戦

カン陣営、シン陣営が向かい合っている。

カン 「皆の者。これより帝位を剥奪した逆賊・シンを討ち果たす。裏切者たちの兵に容赦はいらぬ。徹底的に殺せ。これは王の弔い合戦だ！」

兵士達 「おお！」

× × ×

シン陣営も時を同じくして兵士を鼓舞している。

シン 「皆の者。この度の動乱は我を陥れようとする兄・カンの野心によるものである。しかし、天は全てを見ている。我らは偉大なるカナン王の名のもとに逆賊を討ち果たす。正義の名のもとに、奴らを撃退するのだ！」

兵士達 「おお！」

× × ×

カン 「連弩隊前へ！」

× × ×

シン 「火矢隊前へ！」

× × ×

カナン 「よいか。お前たちは2人で力を合わせてこの国を治めるのだ」

× × ×

カン・シン 「放て！」

両陣営から飛び出す、弓の嵐。

その後に、弩に射抜かれた兵士の悲鳴。

火矢で点火した火災の音。

カン 「騎兵隊、用意！」

× × ×

シン 「槍隊、用意！」

× × ×

カン・シン 「突撃！」

大地を揺らす騎兵の突撃音。

多くの兵士たちの怒声が響き渡る。

20

○東方の港町。

カンに敗れたシン達が潜伏している。

ジョブク 「シン様。お気を確かに」

シン 「都を追われ連戦連敗。戦っては逃げて戦っては逃げ。もはやこれまでか」  
后 「何故、我らがこのような目に合わねばならぬのだ」  
シン 「母上、これ以上我らの誇りを踏みにじられるよりはいつそこの場で」  
ジョフク 「早まってはなりません。ここは海を渡りましょう」  
シン 「何と、この国を捨てるといふのか」  
ジョフク 「国よりもシン様の命の方が大切。生きて、再起を狙いましょう」  
后 「シン、ここは生き延びるのです」

21

○海・船上。

ジョフク 「隊列を乱すな！ 他の船も決して離れるではないぞ！」  
后 「シン！ 追っ手が」  
シン 「もう見つかったか」  
オウモウ 「カン様！ シンの船を見つけました！」  
カン 「逆賊め。逃がさんぞ、シン！」  
后 「カン、何をいうか。お主こそ、大王の意思に背いてただで済むと思っているのか！」  
シン 「母上、さがってください！」  
カン 「シンにつくとは、もはや母ではないわ。王殺しには死を！ 射的用意！」  
オウモウ 「射的よーい！」  
シン 「もはやこれまでか」  
カン 「放て！」

その時、火山が爆発する船を襲う。

高波にさらわれる船達。

オウモウ 「な、なんだ！」

ジョフク 「ふ、船を押さえろ！」

シン 「山が爆発している」

后 「大地が怒り狂っているのです」

カン 「逃がすな！ シンを討て。シンを討つのだ！」

22

○島の海岸。

海岸に打ち上げられているシン達。

シン 「う……うう……」

倒れているシン達を見つけた島民達。

島民① 「ああ！」（人が倒れてる！）  
島民② 「こ、こ、ひひ！」（こっちも、こっちも）  
島民③ 「いだ！いだだ！」（怪我してるみたいだ）  
島民② 「んがががが」（こっちもひどい！）  
島民① 「おーみみー、でーれー」（おーい、みんな！ ちょっと手伝ってくれ！）

○ある島民の家。

島民たちがシン達を看病している。

シン 「……（目を覚まして）ここは」  
島民① 「あーあー」（やっと起きたか）  
シン 「お前は誰だ？」  
島民② 「うう？いーみーだ？」（言っていることがわからない）  
ジョフク 「（目を覚まして）シン様！ ご無事で」  
シン 「ああ、この島民たちが助けてくれたようだ」  
島民③ 「うあー、うあー」（水飲むか？）  
シン 「くれるのか？ かたじけない（水を飲む）」  
后 「（目を覚ます）シン！」  
シン 「母上、どうやら私たちは助かったようです」  
ジョフク 「あの火山の噴火に救われたようです」  
后 「なんと。あの火山は大王のご意思。大王の「生き延びよ」というお告げなのですわ」  
島民① 「しーにーくー」（鹿肉、食べるかい？）

シン達、ガツガツと肉を食べる。

島民② 「はーぐーぐー」（腹減ってたんだなー）  
島民① 「やーずーぐるぐるゆるゆるかーかー」（随分ひもじい思いをしたんだらうなー）  
島民③ 「はーまーたつぷたつぷ」（腹いっぱいになるまで食わせてあげようよ）

23

○数か月後・海辺。

シン達が海で釣りをしている。

島民①「ひーひー、あーあもー」（引いてる引いてる。もっとあげて！）  
シン「おお、おお！」

島民②「ひーひー、あっぱ！」（もってかれちやうよ、しっかり！）  
ジヨフク「シン様。もう一息ですぞ！」

シン「んー、だあ！」

島民③「うー、かーつお」（うわー、カツオだ！）

ジヨフク「さすがシン様！」

島民②「サスガシンサマ」

島民①「サスガシンサマ」

島民③「サスガシンサマ」

ジヨフク「おお、お前たちもそう思うか！ さすがシン様！ はい！」

島民②「サスガシンサマ！」

島民③「サスガシンサマ！」

島民①「サスガシンサマ！」

シン「こちら、何を言わせてるのだ」

ジヨフク「いやいや、こんな大きな魚を釣り上げたのですぞ。さすがシン様ではありませんか！」

シン「ならば、沢山釣って島の者と一緒にあたべようぞ」

ジヨフク「今夜はこれをさばいて、山ぶどう酒で乾杯もいいですな」

シン「おお、旨そうだな」

島民①「ういー、じゅんじゅん、うう」（じゃあ私達たち、酒の準備で先に戻るね）

シン「お、酒を用意してくれるのか？」

島民②「バーイ」

島民③「シンサマ ガガ」（あとでまたくるね！ シン、頑張つてな！）

島民達、去る。

シン「はー、釣りは楽しいもんだな」

ジヨフク「シン様は釣りが向いているのでしよう」

シン「そうらしいな。しかし、この島は子供ばかりだな」

ジヨフク「大人は出稼ぎにでもいつているのでしようか」

シン「我々が避けられていないといいのだから。ああ、そういえば母上は？」

ジヨフク「皇后さまは今日も家臣たちと畑仕事しております」

シン「元気なお方だ。なあ、どうおもう？」

ジヨフク「何がでございますか？」

シン「父上が言っていた呪われた島とやらはここなのだろうか？」

ジヨフク「この穏やかさ。恐らくは別の島ではないでしょうか」

シン「お前もそう思うか（海を眺めながら）なあ、いいなこの島は。大陸で争いをしていたのが遠い昔のころのように思えてくる」

ジヨフク「この波のように穏やかでございますな」

シン 「この島は平和で争いもなく人々はみな平等で欲がない。自分だけが豊かになろうとせず、絶えず周りの人々に分け与える。まるで理想郷だ。我々が生き延びれたのもそんな島の人々のお陰だ」

ジョフク 「……」

シン 「私はこの暮らしが好きだ。彼らの言葉もわかってきたし。ここで島一番の釣り人になるのも悪くない」  
后 「なりません」

后、家臣たちを引き連れてやってくる。

シン 「母上、いらしたのですか」

后 「シン、あなたには釣りよりも大きな仕事があります」

シン 「何の話ですか？」

后 「あなたは、神に選ばれた人間です。あの時の火山で助かったのはそういうこと」

シン 「たまたま運がよかった」

后 「そうではありません。私は分かりました。我々は選ばれたものだからこそ、試練を与えられているです」

シン 「試練？」

ジョフク 「汚名を着せられ、命を狙われ、国を追われたということをございましょう」

后 「そして苦難の果てにこの地に流れ着いた。我々は生き残った。これは神の啓示なのです。シンよ」

シン 「はい」

后 「この島に新たに王国を築くのです」

シン 「国を？ しかしここには島民たちが」

后 「神は我々にこの島をお与えになったのです」

シン 「与えたといっても、ここは島民たちの土地ですから」

后 「奪うのです」

ジョフク 「皇后さまは家臣たちと畑仕事をしているようにみせかけて、武器をお作りになっていたのです」

シン 「なんだったって」

ジョフク 「大陸では千人いた家臣団もいまや数十人。しかし、武器さえあれば島の制圧は容易です。幸運なこ

とにこの島の部族たちは軍備をもっておらず大人もおりませぬ」

シン 「だが、島民は我々を助けてくれたのだぞ」

后 「これからはじまる千年の栄華のためには多少の犠牲はやむをえません。それに島民達も王国民になることでより豊かな生活ができるでしょう」

ジョフク 「シン様。大陸からはいっ逆賊・カンが襲ってくるかわかりません。我々が生き残るにはこの島を占領し、国力を養い兵力を高めるのです。あなた様の血をここで絶やしてはなりません！」

后 「シンよ、この島を釣り上げるのです。それが神のご意思（シンに剣を渡す）」

シン 「……」

○島・ある部落。

兵たちが乱入してくる。

ジョフク「この村落を制圧せよ！」

兵士①「抵抗するな。抵抗すると命はないぞ。そこ、こっちに集まれ！そこ、隠れるな！」

島民③「ンナ！ナ！」（なんてことを）

島民①「ナ？ナムガ？」（何？何が起きたの？）

島民②「テオ、サ！」（渡来人たちだ！）

島民①「シンサマ、ナ？」（シン達が。何で！）

島民③「テオ、サ、デーダ！」（渡来人、この村から出ていけ！）

隠れている島民たちが投石で兵士に対抗する。

兵士①「（投石を受けて）うわっ！投石だと。貴様、反抗するののか！」

ジョフク「くっ。反抗するとうなるのか。見せてやれ。弓隊、放て！」

兵士達、隠れている島民達に一斉弓射を行う。

島民②「ううっ！」

ジョフク「見せしめにこの集落を焼いてしまえ！」

兵士①「燃やせー、燃やせー、すべて燃やしてしまえー！」

島民①「ダガ、ナン……」（何で、何で、こんなことを……）

○島・部落の中央。

四方八方から煙が上がっている。ここに手を繋がれた島民たちが集められている。

中央には、シン・后・ジョフクがいる。

ジョフク「シン様、島の制圧が完了しました」

后「ご苦労であった」

兵士①「あらかたの島民はここに連行しました」

島民②「シンサマ、ナ？ナ！？」（シン、シン！何でだよ。何でだよ！）

兵士①「貴様、黙れ！（島民②をぶつ）」

島民①・③「シンサマ！シンサマ！！」

后「シン、はじめなさい」

シン「島民たちよ。突然のことで混乱していると思う。しかし、安心して欲しい。我々はその命を奪うものではない。我々は神に選ばれた民である。そして、この島は神に選ばれた島である。我々はこの、

王国を建国することを宣言する」

ジョフク「喜べ、お前たちは今日より王国の民となるのだ」

后「この島は我々、神に選ばれたもの、「新島民」が統治する。お前たち島民は「旧島民」として、我々に導かれるのだ」



ジヨフク「島のすべての大地は王国のモノとする」  
 シン「(島民に) 皆の者、……これは神のご意思なのだ。  
 ジヨフク「シン王、万歳！」  
 兵士達「シン王、万歳！」

万歳の声が延々と続く。

○島の山岳部内。

ヨシヤ達が島民を使って山林を伐採している。

山には木を切り倒す音が鳴り響いている。

それとあわせて人足達の不気味な歌がこだましている。

人足③「切れ、切れ、切れ、切れ、切れ、切れ、切れ、切れ、切れ、切れ(ずっと続く)」

魔女「ヨシヤさん、これでは全然足りません」

ヨシヤ「まだまだだ！ もっともっと山を切り崩すんだ！」

× × ×

タカ「テル、聞いたかい？ ヨシヤさん、島の土地、手当たり次第買い取ってるらしいんだよ」

テル「オレも聞いた。しかも土地を貨幣に変えて食い扶持がなくなった連中を集めて何かやってるらしい」

タカ「ヨシヤさんの財力は今や大君をしのぐほどだっという噂じゃないか」

ヒカリ「ヨシヤさん、その財をまもるために兵を雇って警護に当たらせてるって」

タカ「それにねえ、嘘だと思うんだけど……魔女達が大陸の方に渡ろうとするのを手伝っているっていうん

だよ」

テル「大陸に!？」

× × ×

木を伐採して裸になった山地に水路ができています。

流れる水路の音。不気味な人足達の歌。

人足達「流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ、流せ(ずっと続く)」

ヨシヤ「よし、これより砂鉄を採取する。さあ、土砂を川に流せ」

人足達「おお！」

人足達、土砂を川に投げ込んでいく。

× × ×

タカ「テル、テル。山が、山がなくなってるよ！」

テル「母さん、そんな山がなくなるって。えっ、ほんとだ！」

タカ「ああ、こんな恐ろしいことしたら罰があたるよ！」

テル「どうなってんだよ、この島は！」



宮殿にマナとウズメ、侍女がいる。

ウズメ 「マナおばあちやま、ご相談があるの」

マナ 「これはウズメ姫。どうしましたか」

ウズメ 「えへへ、ウズメね、お嫁さんになりたいの」

マナ 「まあ」

侍女 「ウズメ様はまだ九つでございます。結婚にはまだお早いかと」

ウズメ 「いーの、ウズメはいいこだから早くに呼ばれるんだもん。だからはやくおよめさんになるの」

マナ 「お相手は？」

ウズメ 「うふふ、いねを作ってるんだよ。とつてもかっこいいんだ」

侍女 「それは旧島民ではありませんか。なりません」

ウズメ 「どうしてダメなのー」

侍女 「姫様。貴方様は王家の血を引くものですぞ」

ウズメ 「王さまにはヤマトお兄ちゃんがなるんだからウズメははかんけーないもん」

侍女 「確かにヤマト様はいずれ17代目の王におなりになりますますがそれとこれとは」

ウズメ 「マナおばあちやまだって、しんとーみんじやないんでしょ。お母様から聞いたもん！」

侍女 「マナ様は新島民でも旧島民でもありません。神の化身でございますよ」

マナ 「神の化身とはいいすぎですよ」

侍女 「しかし、この島の繁栄はマナ様が教えてくださった稲作があったからのこと。第15代、ジンム大帝の時に起きた大飢饉を乗り越えられたのも、マナ様の稲作の技術があったからです」

マナ 「懐かしい。あの時は大変でしたね」

ウズメ 「ねえ、おばあちやまいいでしょ」

タマテ 「駄目だ」

ウズメ 「お父様」

侍女 「タマテ王」

タマテ 「お前にはふさわしい相手を見つかる。次期王女が旧島民と一緒になるなど許されん」

マナ 「タマテ、体の具合はよいのですか」

タマテ 「ええ。母上、それよりも不可解なことが」

マナ 「何か？」

タマテ 「我が王国の歴史書編纂の件です」

マナ 「随分進んでいると聞いておりますが」

タマテ 「はい。先代15代ジンム大帝からかなり前までさかのぼって記すことができたのですが、古代の部分で歴史学者から妙な指摘を受けました」

マナ 「学者らが何と」

タマテ 「王の系譜を在位期間で辿っていくと、初代シン王の在位期間があわないと」

マナ 「言い伝えではシン王は早くに神に召されたため数年しか在位していなかったと」

タマテ 「ええ。しかし学者たちがいうには、シン王の在位期間は40年はあったのではないかと」

侍女 「40年！ 建国してから40年もご存命だったということですか」

タマテ 「母上、ジョフクという名は聞いたことがありますか」

マナ 「初代シン王を補佐したモノだとは」  
 タマテ 「そのジョフクの子孫と言われる家に石板が残っております。そこには、「大陸から渡ってきたものは5、60年は生きていたと」  
 侍女 「しかし、神に選ばれし者は代々短命のはず。ありえませんが」  
 タマテ 「そうだありえない。私は天罰を受ける覚悟でシン王の墓を掘り起こしました。そしたらこれが」  
 マナ 「！これは」  
 タマテ 「母上、何か」  
 マナ 「いえ、何でもありません」  
 タマテ 「母上、何か知っているのではないですか」  
 侍女 「タマテ様、もうこれくらいで」  
 タマテ 「母上、この文字は学者でも解読できませんでした。何かごぞんじでしたら、う！」  
 侍女 「タマテ様？」  
 タマテ 「胸が……苦しい……」  
 ウズメ 「父上！」  
 マナ 「タマテ、タマテ！」  
 × × ×  
 × × ×  
 マナ 「皆のもの、泣いてはなりません。タマテ王はその偉大さ、その美しさ故に神の元に召されたのです」  
 家臣達 「ははっ！」  
 マナ 「タマテ、我が愛おしい子よ……」

○島内の宮殿。

時は流れ17代目ヤマト王の治世に移っている。年老いたマナ、侍女、ウズメがいる。

侍女 「これはウズメ様ではございませんか」  
 ウズメ 「変わりないようですね。おばあ様、少しよろしいでしょうか」  
 マナ 「ウズメ、どうしましたか？」  
 ウズメ 「実はお耳にいたいことがあります」  
 マナ 「あまりいいお話ではないようですね」  
 ウズメ 「ええ。実は我が兄。ヤマト王のことで」  
 侍女 「もしやあのことでございますか」  
 × × ×  
 × × ×  
 テンジ 「ヤマト様。マナ様の件、おかしいと思いませんか」  
 ヤマト 「どういうことだ？」  
 テンジ 「我が王国の帝位はヤマト様まで17代続いております。そのうち、15、16、17代と政治の中心に君臨するのがマナ様。これだけ長く政（まつり）ごとの中心にいるのはマナ様だけです」  
 ヤマト 「確かに。おばあ様はこの島での一番の長寿だからな」

テンジ 「それがおかしいのです。神に選ばれし者は短命なのです。その証拠に王国民は皆短命でございます。それに対して、マナ様は老いながら、延々と生きながらえてこの国の権力の座に居座っている」

ヤマト 「私も王とはいいながら、実権はおば様が握っている」

テンジ 「その通りです。しかもマナ様は先代タマテ様がなくなってから、島民を集めて何やら怪しい呪術を「神々の領域」で行っているというではありませんか」

ヤマト 「立ち入りが禁じられているあの地域で何を」

テンジ 「何でも大陸に渡る準備をしているという噂です」

ヤマト 「何だと！ シン王の時代より大陸への渡航は禁じられているはずだ。何故」

テンジ 「ヤマト様。マナ様は魔女なのでございますよ。この世を乱し王家を乗っ取るうとする魔女に違いありません」

ヤマト 「なんと！ おば様が魔女だと」

テンジ 「そうでなければ、あのように長生きし、醜い姿をさらしている訳がございません。美しい肉体のまま

死を迎えられないのは神に見放された証拠」

ヤマト 「確かにこの国の臣民は王族共々、美しいまま神に召されるのが定め。ではやはり魔女なのか」

テンジ 「今こそ、魔女討伐のご下知を」

× × ×

ウズメ 「権力を狙う陪臣テンジが兄になにやら吹き込んでるようなのです」

侍女 「テンジめ。マナ様があったからこそその治世をなんと思っておる」

マナ 「よいのです。それにヤマト王もそのような讒言に耳をおかしになるとは」

その時、大きな音と共にテンジと兵士②、③が入ってくる。

マナ 「テンジ、どうしましたか？」

テンジ 「神聖なるヤマト王の命にて、魔女・マナを投獄する」

ウズメ 「なんですって！」

テンジ 「魔女をひつとらえろ！」

兵士② 「はっ！」

侍女 「マナ様！」

ウズメ 「何をするの、やめなさい！」

兵士③ 「どけ、抵抗するな！」

27

○牢獄。獄につながれたマナ。ウズメが面会に来ている。

マナ 「ウズメですか？」

ウズメ 「おばあ様。もしや目が見えぬのですか」

マナ 「ええ。逃げられないようにと」

ウズメ 「なんとむごいことを。テンジのせいでおばあ様は」

マナ 「いいのです。もう充分に見てきましたから。ウズメ、あなたが来たということはわたくしの処刑はもう間近ということですね」

ウズメ「……何度も王にかけあつたのですがどうしようもなくて。でも、おばあ様を慕う島民たちが兵を起こそうと今準備をしております」

マナ「もういいのですよ。これ以上島民を苦しめたくありません」

ウズメ「しかし、おばあ様は何も悪くない」

マナ「わたくしは……償わなくてはならないのです」

ウズメ「何をですか？」

マナ「ウズメ。愛おしい私の孫娘よ。あなたに頼みたいことがあるのです」

ウズメ「私でよければ」

マナ「このことを話せばあなたの運命は大きく変わってしまうでしょう。事の大きさに絶望するもしれません。それでも、聞いてくれますか」

ウズメ「……はい」

× × ×

テンジ「ヤマト様。魔女が獄中で息絶えたようです」

ヤマト「そうか。死んだか」

兵士②「申し上げます。ウズメ様と魔女の側近たちが城内に見当たりません」

ヤマト「なんだと！」

兵士③「申し上げます。ま、魔女の遺体が消えました！」

テンジ「消えただと！ 探せ、探すのだ！」

× × ×

マナの声「ウズメ、頼みます」

ウズメの声「おばあ様の背負ってきた苦しみ。この私が引き継ぎます」

× × ×

赤子が泣く声が聞こえてくる。

タカ「ヒカリ、頑張ったね」

ヒカリ「お母さん……」

タカ「テル、生まれたよ！ 可愛い女の子だよ！」

28

○宮殿。大君とネジメが話をしている。

大君「ネジメ、お前を大將軍に任ずる」

ネジメ「ありがたき幸せ。……討伐せよと」

大君「その通りだ」

ネジメ「しかし、あの者との数々の取り決めは」

大君「すべて反故にせよ。民は我のものなり」

ネジメ「承知しました」

○テルの家

テル 「何だって！ 大君が！」  
ヒカリ 「父が兵を率いてヨシヤさんを」  
タカ 「あの人。何だってお上に立てついたらんたい」  
テル 「助けなきゃ！ オレ行ってくる！」  
ヒカリ 「あ、テル！」

○「神々の領域」付近。

王国軍が集結している。テル、陰からネジメの演説を聞いている。

ネジメ 「皆の者、よく聞け。この島は代々大君が治めてきた。しかし、侵略者ヨシヤは交換所を作って流通を牛耳り、貨幣で島民を支配し、武装し、領地を奪い、魔女の力を借り怪しい術を研究し、島民は新旧問わず過酷な労働を強いられている。挙句の果てには、船を作り若き島民を奴隷として次々に大陸に連れ去っているというではないか！」

テル 「なんだって！ ヨシヤさんが！ 何で大陸に？」

ネジメ 「よってこれより、「神々の領域」を攻める。皆の者、恐れることはない。相手は烏合の衆。我らはシン王以来不敗を誇る王国軍である。もし、この戦で命を落とすようなことがあればそれは神に召されたものぞ。子孫代々まで誇りに思うがよい」

王国兵 「おお！」

× × ×

墓石の前でヨシヤが手を合わせている。

ヨシヤ 「……見ててくれ。俺は必ず」

魔女 「ヨシヤさん！」

ヨシヤ 「どうした？」

魔女 「ネジメが王国軍を率いてあなたを討伐に！」

ヨシヤ 「！ 大君の命か」

魔女 「ええ。愚かなことを」

ヨシヤ 「……何故、何故わからないんだ！」

魔女 「ヨシヤさん」

ヨシヤ 「応戦する。鉄器兵を準備させてくれ」

魔女 「ヨシヤさん。あなたは」

× × ×

テル 「オレは騙されたのか？」

ネジメ 「ヨシヤはこの島に災いをもたらす！ よって大君から、ヨシヤ討伐の下知がくだった。悪しき異人を排除し今こそ、ヨシヤに奪われた土地を取り返すのだ！」

兵士達 「おおおっ！」

○テルの家。

タカとヒカリが子供をあやしながらが戦況を気にしている。  
遠くで戦の音がする。

ヒカリ「凄い音ですね」

タカ「テルったら、戦を見に行くなんて。まったく」

ヒカリ「今度の戦、王国の精鋭部隊を父が指揮しているそうです」

タカ「そうかい。それじゃヨシヤさんも終わりだね。でも、これでやっと島も平和に……」

家に飛び込んでくるテル。

テル「た、大変だ！（息が切れて声がでない）」

タカ「テル！」

テル「（はあはあ）王国軍が、王国軍が……」

タカ「なんだい、凱旋してこの家にでもよるのかい？ 勘弁してほしいよ。また飯を食わせるとか」

テル「王国軍が負けた！」

タカ「なんだって！」

ヒカリ「お父様が！」

テル「ヨシヤ達は恐ろしい武器を持っていて、何でも切ってしまうんだ。王国軍の兵士はなすすべもなく殺されて……みんな死んだ！」

× × ×

ネジメ「大君……万歳！」

ヨシヤの兵士に倒されるネジメ。

× × ×

タカ「あああ、王国軍が負けたらどうなるんだい、この島はどうなるんだい？」

ヒカリ「お父様……」

タカ「ヒカリ、ヒカリ、しっかりおし！ ヒカリ！」

テル「オレのせいだ。オレが、あの人を助けたから……オレのせいだ」

眠っていた赤子が目を覚まし、悲しげに泣いている。

○海岸・深夜。

「オレがバカだった。オレたちは利用されてたんだ……クソ！ オレはどうしたらいいんだ！」

満月が怪しく光っている。赤子を抱いて一人待ち続けるテル。

そこにヨシヤが護衛兵を連れて現れる。



ヨシヤ「お前たちはここで待て」  
護衛兵「はっ」

テル「ヨシヤさん。来てくれるとは思わなかった」

ヨシヤ「約束だからな」

テル「覚えててくれたんだね」

ヨシヤ「女の子か」

テル「ああ」

ヨシヤ「おめでとう」

テル「ありがとう」

ヨシヤ「名前だよな」

テル「ああ……ヨシヤさん、覚えてるかい？ あの日も綺麗な満月が出てて、あんたはここに倒れていた」

ヨシヤ「お前が俺を救ってくれた」

テル「オレもヨシヤさんのお陰でヒカリと一緒になれた。それでこの子が生まれた」

ヨシヤ「そうだな」

テル「………ヨシヤさん、名前をつける前に、この子を抱いてやってくれ」

ヨシヤ「……ああ」

ヨシヤ、テルの赤子を抱こうとする。

テル、赤子をくるんでいた布をはがす。

そこには短刀が月光を受けて妖しく光っている。

テル「あんたは生きてちゃいけない人だ！ もうこれしかないんだ！」

テル、勢いよくヨシヤに短刀を差す。

ヨシヤ「うっ、テ、テル……」

テル「この島は渡さない！」

護衛兵「ヨシヤ様！ おのれ！」

テル「オレがこの島を守る！」

テルの短刀を受けて倒れたヨシヤ。

テル、ヨシヤにとどめを刺そうとするが護衛兵に捕まってしまう。

護衛兵、テルを切りつけようとする。

そこに魔女が現れる。

魔女「やめなさい！」

テル「魔女！」

魔女「ヨシヤさん、しっかり！」

ヨシヤ「……これでいい。当然の報いだ」

魔女 「駄目です。あなたが必要なのです。まだやり残したことが」

テル 「魔女め、お前もオレたちからこの島を奪う気だな！」

魔女 「愚か者！ まだわからないのですか」

テル 「何がだよ」

魔女 「ヨシヤさんは、皆さんを救おうとしていたのですよ」

テル 「オレたちを救う？ お前らもうだまされなれど。お前らオレたちを大陸に売る気なんだろ！ そうはさせない」

魔女 「テル、あなたはその目で何を見ていたのですか」

テル 「どういうことだよ」

ヨシヤ 「お前が悪い訳じゃない」

テル 「どういうことだよ！」

ヨシヤ 「テル、この島は呪われているんだよ」

テル 「呪われている？ 何で」

ヨシヤ 「……俺たちのせいだ」

31

○地下研究所（西暦2045年）

地下100メートルのところにある、最新鋭の冷凍保存の研究を行っている研究所・2号棟。

ヨシヤと助手のエマ、難しい顔をしながら仕事をしている。

エマ 「カナンさん、解凍作業が完了です」

カナン 「おお、生きているじゃないか！ エマ、人工解凍成功だよ」

エマ 「ええ。霊長類の解凍は世界初です」

カナン 「ああ。これで計画は大きく前進だ」

エマ 「記録。本日、大日本次世代電子・2号棟にて霊長類の解凍に成功。地球寒冷化による生態系消失に備

え動植物を冷凍保存させる国家プロジェクト・イザナギ計画は大きく前進。ペーパ―更新完了」

カナン 「ありがとう」

エマ 「お父様もさぞ」

地下エレベーターを使って、マナ、ヨシヤがおりてくる。

ヨシヤ 「サルトウン！」（こんにちは の意味）

カナン 「わ、兄さん！」

ヨシヤ 「キーエルビーファールス？」（元気ですか？ の意味）

カナン 「ミー、エス、タスー、ポーネ」（元気ですよ の意味）

マナ 「エステイボーナ」（それは良かった の意味）

カナン 「姉さん！」

カナン 「ってなんで、エスペラント語なんだよ！」

ヨシヤ 「あはは。今や論文はエスペラント語が主流だろ、研究者としてのマナーだよ」

カナン 「そうだけどき。いい年して夫婦で脅かさないでくれよ」  
エマ 「ヨシヤ、マナ。ビネサンガス（お変わりないですね）」  
カナン 「ってなんでエマまで」  
マナ 「ごめんね。ちよっと近くまで寄ったんで2号棟を覗いてみようかって」  
ヨシヤ 「2号棟の若き天才の仕事ぶりをな」  
カナン 「1号棟の主任研究員達に言われたくないけどね」  
ヨシヤ 「なあお前、今日休みだよな。うち来るんだろ？」  
マナ 「サクラも楽しみに待ってるわよ」  
カナン 「いや、これ終わったらそっちに行こうと思ってたんだけど」  
ヨシヤ 「お前さ、あんまりエマをこき使うと上から怒られるぞ。ヒューマノイドだって休み位欲しいよな」  
エマ 「私は大丈夫です」  
マナ 「エマが良くてもヒューマノイド労働協定に違反したら、大日本次世代電子が責任を問われるの」  
エマ 「私が出勤したいっていったんです。ヨシヤさん、マナさん、このことは内密に」  
マナ 「もちろんですよ」  
ヨシヤ 「エマ、ごめんな。弟がいつもいつも」  
カナン 「っていうか、2人こそ早く帰った方がいいんじゃないの？ 今日、サクラちゃんの誕生日だろ」  
ヨシヤ 「サクセーション」  
マナ 「サクセーション。サクセーション！」  
カナン 「は、何だよ？」  
ヨシヤ 「だから、サクセーション」  
マナ 「サクセーション！」  
カナン 「あつ、アマテラス計画か？」  
ヨシヤ 「ああ」  
カナン 「ってことは、人工太陽が完成したのか」  
ヨシヤ 「ああ」  
カナン 「うわ、つ、ついにやったのかよ」  
マナ 「ええ。私達、ついにやったのよ！」  
カナン 「うわー、エマ聞いたか？ これ、夢じゃないよな」  
エマ 「はい。早速記録します。凍土化した大地を人工太陽で解凍し食糧危機の人類を救う最終手段・アマテラス計画、本日完成し」  
マナ 「エマ、公表前なんで記録はまだ」  
エマ 「すみません」  
カナン 「え、じゃあ何で？」  
ヨシヤ 「影の立役者にまずは報告しようと思ってるな」  
マナ 「カナン君。あなたの置き土産が採用されてるのよ」  
カナン 「何のこと？」  
ヨシヤ 「人工フレアの構造。あれお前の論文がベースになってんだよ」  
カナン 「アレが！ いや、でもあの論文は」  
ヨシヤ 「安心しろ。矛盾部分については俺たちが徹底的に検証して修正を加えた」  
マナ 「それに数百回に及ぶ模擬実験もすべてクリアしているから安心して」

カナン 「まあ姉さんがいうんだったら間違いないな」

ヨシヤ 「だろ？」

マナ 「だからね、人工太陽は私達3人で生み出したっていつでも過言じゃないのよ」

カナン 「そっか」

エマ 「打ち上げはいつからですか？」

マナ 「分解して来週から順次打上げていくわ。できるだけ早くってお願いしているの」

ヨシヤ 「これでもう「白衣の破壊者」だなんて呼ばれなくて済むわー」

カナン 「打ち上げが成功すれば、さすがに新元素利用反対派も納得するだろ」

ヨシヤ 「な」

エマ 「アマテラス計画は、国家最高機密研究ですよね」

マナ 「そう。お国のお陰で私たちは一心不乱に研究に没頭できたってわけ」

カナン 「研究が漏れたら「新元素で核兵器を作ろうとしている」ってまた騒がれて潰されるもんな」

エマ 「人工太陽発熱のメカニズム、ヨシヤさんが成功させた超重核分裂は核アレルギーが強い人々には受け入れにくいものですもんね」

ヨシヤ 「反対派の奴らはこの地球が抱えている問題を直視しようとしなさい」

マナ 「でも人工太陽で耕作地を復活させればきっとみんな喜んでくれるわ」

カナン 「これでやっと食糧欲しさに核で脅しあうこともなくなるのか。文字通り、人類の希望の光になるんだな、人工太陽は」

ヨシヤ 「ああ。んで、カナン、お前の研究の方は？」

カナン 「え」

マナ 「イザナギ計画はどう、進んでる？」

エマ 「サクセーション」

カナン 「さっき、父さん達のチームが20年前に冷凍した猿の解凍に成功したんだ」

マナ 「わあ、凄いじゃない！」

エマ 「親子2代にわたる研究の成果が実を結んできています」

カナン 「エマがずっとサポートしてくれたからな。俺、1号棟から2号棟に移って良かったよ。やっぱりオヤ

ジの夢を何とか叶えたくてさ」

ヨシヤ 「研究一筋だったからな、あの人は」

エマ 「冷凍保存・解凍研究はお父様を超えて今やカナンさんが世界をリードしています」

ヨシヤ 「じゃあ、みんなでお祝いだな！」

マナ 「じゃ、今日はもう帰ろうよ。サクラも待ってるし」

カナン 「そうだね。っていうか、アマテラス計画の成功って、サクラちゃんへの最高のプレゼントになるな」

マナ 「あの子、「今日も仕事いくの」、ってプンで。カナン君、フォローお願いね」

ヨシヤ 「じゃ、エマあとは、ん、なんだ！」

その時、研究室を経験したこともないような巨大な地震が襲う。

マナ 「きゃ！」

ヨシヤ 「ふせろ！」

カナン 「頭を」

エマ 「皆さん！」

長く揺れた地震が収まる。と同時に、地下を流れる「ゴーツ」というマグマの音が空間を包み込む。

カナン 「な、なんなんだ？ この音？」

ヨシヤ 「地震か」

マナ 「なんて大きな揺れなの」

カナン 「エマ、大丈夫か？」

エマ 「私は問題ありません。ただエレベーターの電源が落ちたようです」

マナ 「地上は大丈夫かしら。ちよっと見てみる。ニュース」

マナ、大日本次世代電子が開発したモバイルデバイス・リストを使ってニュースを見る。

キヤスター① 「大隅諸島沖で巨大な地震が発生した模様です。現在調査中ですが只今の地震は震度7を観測」

② 「今回の地震は観測史上最大のマグニチュード10ではないかと言われており」

③ 「火山の噴火により、島々が火砕流に覆われる危険性が」

「(その他、沢山のニュースが流れている)」

ヨシヤ 「余震も気になるし。地上に出れるうちに出了方がいいかもな」

エマ 「この研究所、耐震性はありますが早めに出た方が」

カナン 「そうだな」

マナ 「サクラに連絡しなきゃ。ん」

その時、マナのリストが鳴る。マナ、リストを取る。

マナ 「どうしたの？」

研究員① 「マナさん大変です地震で噴き出してきたマグマが！ マグマが人工太陽を飲みこんでます」

研究員② 「(裏で) 15時37分 人工太陽がマグマに接触！」

マナ 「なんですって！」

ヨシヤ 「そこは安全なはずだろ！」

研究員② 「こんな地震誰も想定してないですよ！ それより人工太陽のフレア機能が制御不能なんです。マグ

マに加熱されて急速に超重核分裂を始めてます」

研究員③ 「何？ え、分裂基準、レベル7超えただど！」

マナ 「レベル7。危ないわ。至急、緊急停止装置を！」

研究員① 「もう使ってます！ でもダメです。止まらないんですよ」

研究員② 「至急、官邸に応援要請を！」

研究員③ 「そんなんじゃないや間に合いませんよ！」

ヨシヤ 「なら、絶対零度システムを作動させろ！」

研究員③ 「システム損傷。作動不可能です！ くそっ！」

ヨシヤ 「完全隔離パネルで今すぐ下界から遮断するんだ。今すぐにだ」

研究員① 「もうやってますよ。でも、マグマが邪魔して！ わあなんだ、この熱量は！」  
ヨシヤ 「スーパーフレアが起きるぞ！ 止める、頼む、止めてくれ！」  
研究員① 「止める！ なんとかして止める！」  
研究員③ 「非常凍結機能チーム応答なし！」  
研究員② 「何でもいいから止める、止めるんだ！ 止めるおとおっ！」  
マナ 「あなたたち、逃げなさい。今すぐここからにげ」  
研究員③ 「うわ、ひ、光が、光が！」  
全研究員 「わあああああああああああああああああああああああつ！」

地上から「ドーーーーー」という音が聞こえ、研究所が振動する。

カナン 「人工太陽が……爆発したのか……」

ヨシヤ 「……」

マナ 「……」

カナン 「どうなんだ！」

ヨシヤ 「……終わりだ……」

カナン 「どの位」

ヨシヤ 「……半径300キロはもう」

カナン 「地上には出れるのか」

ヨシヤ 「超高濃度の放射線汚染で数秒で致死量に達するだろう」

エマ 「私なら」

ヨシヤ 「高電磁波を浴びたらエマも終わりだ」

エマ 「そこまですか」

カナン 「……」

マナ 「(エレベータに向かう)……」

カナン 「姉さん」

マナ 「……」

ヨシヤ 「……」

マナ 「……(エレベータに乗ろうとする)」

カナン 「(それを止めて) 姉さん！」

マナ 「いかなきゃ。サクラが待ってる」

カナン 「姉さん、サクラはもう……」

マナ 「でも」

ヨシヤ 「行こう、マナ (エレベータに乗ろうとする)」

カナン 「兄さん！」

ヨシヤ 「エマ、エレベータの電源を非常用に切り替えてくれ」

マナ 「カナン君、離して」

カナン 「死ねば許されるのかよ！ 死んだら世界が救われるのかよ！ ……死んでサクラちゃんが戻ってくる

のかよ……」

ヨシヤ 「……」

マナ 「……」

カナン 「俺たちにできることはもうないのか」

ヨシヤ 「……恐らく数百年は放射線量が下がらない」

カナン 「数百年経てば下がるんだな」

エマ 「カナンさん」

カナン 「今地上に出ても死ぬだけだ。でも数百年後なら」

ヨシヤ 「お前」

カナン 「冷凍保存で未来に行けば地上は致死量ほど汚染されていないかも知れない」

エマ 「でも、カナンさん。人間では成功していません」

カナン 「ああ。だから失敗して犬死にするかも知れない。その可能性の方が高い。ただ、このまま何の役にも

立たず死ぬよりは、一抹の望みにかけて未来を目指すべきだ」

ヨシヤ 「解凍のタイミングをセッティングできるのか？」

カナン 「残念ながら今の技術では。研究で分かったんだけど肉体が蘇生できるタイミングは、それぞれの遺伝

子で異なるんだ。もし無理に目覚めさせようとしても細胞が壊れてしまう。だから、解凍して蘇生

できるのは数年かも知れないし、数百年かも知れない。これも賭けだ」

ヨシヤ 「……誰が解凍するんだ」

エマ 「私がやります。この研究所の自動電力供給システムから電力を供給すれば私は恐らく100年は動け

ると思います。この任務ができるのは私しかいません。やらせてください」

カナン 「エマ、ありがとう……俺は行く。もし蘇生できれば何かの役に立てるかも知れない」

エマ 「肉体は健康な方が冷凍処理に対する抗体を持ちます。ここの放射線量も徐々に上がっています。行くな

ら早い方がいいです」

カナン 「兄貴」

ヨシヤ 「……ああ……ああ……マナ……」

マナ 「……」

○研究所（西暦2300年頃）

マナ、ヨシヤは未だに冷凍保存されている。

以降、カナンの語りで展開する。（語りながら、そのシーンを動きで見せる）

カナン 「先に目が覚めたのは俺だった」

エマ 「お帰りなさい、カナンさん……今は、2300年です。計算上では」

カナン 「俺が冷凍されてからあれから250年も経っていた。エマお前は大丈夫か？」

エマ 「私の強化ボディも経年劣化でそう持ちません。恐らく残り数十年しか」

カナン 「それじゃ、2人が解凍される時には」

エマ 「ご安心ください。この250年の間に自動解凍装置を開発しました。これがあれば、お二人はよき

タイミングで自動的に解凍蘇生されるはずですよ」

カナン 「エマは、無常に流れたこの時間を、俺たち3人のために費やしてくれていた」

エマ 「カナンさん。私も一緒に地上に連れて行ってください。私にはもう先がありません。最後までカナンさんのお役に立ちたいのです」

カナン 「俺とエマは祈るような気持ちで地上に出た」

### ○地上・島

カナン 「地上では「絶望」という名の風がずっと吹いていた。人工太陽の爆発によりすべては焼失しあるのは大地だけだった。かつて研究所があった一号棟は火山灰で埋まっていた。文明が再建されなかったのは寒冷化による食料の奪い合いに端を発する世界大戦が勃発したからなのかも知れない。ただ、この島にわずかに人類は生き残っていた。しかし出会う人々はすべて10代。大人がいない。それが何を意味するのか気づくのに時間はかからなかった。呪われた太陽は島民に長生きを許さなかったのだ。それを起こしたのは俺たちだ。俺はこの時代で何をすればいいのか」

エマ 「探しましょう。汚染されていない土地を。蘇るヨシヤさんとマナさんが幸せに暮らせる大地を」

カナン 「そんな場所もうこの島には残されていない」

エマ 「大陸なら。海を渡った先の大陸にならあるかもしれません」

カナン 「大陸……俺とエマは大陸に渡るために船を作った。数日後、俺たちは大海原に出た。海を漕いで漕いでひたすら漕いだ。数日後、俺たちは見知らぬ大陸にたどり着いた。俺たちを助けてくれたのは村人だった。この大陸も文明は一度滅んでいたようだ。村人たちは貧しい暮らしをしていたが、俺たちを優しく労わってくれた。村には年寄りがあった。この土地の人間は長生きをしている！俺たちはこの大陸が汚染されていないことを知った。ある日、俺とエマが狩りで村を離れている間にこの村は隣国の豪族に襲撃された。目的はこの村の土地、食料、女だった。沢山の仲間が殺され辱めを受け土地を奪われた。俺は恨んだ。このような無秩序な世界の到来の片棒を担いでしまった自身に、そして世界が減んでもいまだに争いを続ける人間たちを！俺は決めた。今の俺にできることは仲間たちを守ること。俺は生き残った村民を率いて戦う道を選んだ。エマの死を恐れぬ戦いぶりと復讐に燃える村民たちの闘志によって我々は村を奪還した。勢いにのる我々はさらわれた仲間を解放すべく隣国を攻め滅ぼした。すると、危機を感じた周辺部族は我々に兵を向けた。俺とエマは仲間を守るため来る日も来る日も戦いに明け暮れた。気が付けば我々に抵抗する勢力はなくなっていた。仲間から戴冠を受けて王になった俺は、エマと共に国作りに邁進した。皆が幸せに暮らせる国を夢見て。振り返ると長い夢を見ていたような気がする。俺はあの時、島の人々を見捨ててこの地に来た。そしてこの地で多くの人々の命を奪った。俺がこの時代に来たことは、俺がしてきたことは正しかったのかどうか未だに分からない。あの頃に戻れたらと思う。エマももう動かない。俺ももう……これから旅立つ世界ではどんな罰が俺を待っているのだろう。兄さん、姉さん、俺の手はどうしようもないほど汚れてしまいました。だから俺だけで充分です。兄さん、姉さん。あと頼みます。この地で待っています……」



ヨシヤは未だに冷凍保存されている。  
以降、マナの語りで展開する。(語りながら、そのシーンを動きで見せる)

マナ 「目が覚めるとカナンとエマはいなかった。カナンは島での出来事を書き残してくれていた。そして最後には「文明は滅んだ。2人が暮らせる土地を探しに大陸に行く」と綴られていた。ヨシヤは未だ目覚めない。エマが開発した装置はしかるべきタイミングで自動解凍がはじまるという。私は覚悟を決めて地上に出た」

### ○地上・島

マナ 「島は予想に反して自然にあふれていた。しかし、私が知っている島の風景は跡形もなく未来というよりむしろ古代に逆境しているように見えた。島には人が生きていた。言葉も通じる。人々は新島民と呼ばれる支配層と旧島民と呼ばれる労働層に二分されているようだった。旧島民達はみな飢えていた。聞く所未曾有の飢饉で食糧が枯渇しているらしい。それにも拘わらず新島民からの過酷な搾取を受けており、旧島民と新島民の争いはまさに一触即発の状態だった。この時代も食糧をめぐる人々は血を流そうとしている。何とかしなければ、でも私に何ができるのか？ 私は懸命に旧島民達を説得し、研究所に残っていた種籾を育てることにした。新島民達の目の届かない場所を探し新たに開墾した土地は多くの実りをもたらした。彼らは恵をもたらした私を「豊穡の神」と呼ぶようになった。しかし、飢餓を脱した島民たちは若くして死んでいった。私が生み出したあの太陽は未だに彼らを苦しめていたのだ。この私が神だなんて……この罪を私はどう償えばよいのだろう。しばらくして噂を聞きつけた島の王・ジンムが田畑を奪うため兵を率いてやってきた。私は殺される覚悟でこの土地を人々から取り上げないでほしい、と願い出た。神と呼ばれる私に関心を持ったジンムは、自分の妃になるならこの土地は旧島民たちに授けようといった。私にはもう失うものなどないと思っていた。私は、ジンムの妃となり彼の子供を身ごもった。私はジンムと共に、灌漑工事を行い水田を作り島は慢性的な食糧難を脱した。王妃となった私はヨシヤが眠る研究所一帯を譲り受け「神々の領域」を名付け島民が立ち入ることを禁じた。数年後、ジンムは亡くなった。それから時が経ち、息子・タマテもやはり若くして亡くなった。私はみずから生み出した呪いでまたもや夫と子供を失った。繰り返される死。私の前で数多くの若い命が散っていく。私だけが一人老いていく。この長い暗闇に光を灯してくれたのは、サクラによく似た孫娘・ウズメの成長とカナンだった。初代の王の墓から見つかった巻物にカナンの半生が描かれていたのだ。カナンは私たちのために大陸に王国を作ってくれていた。大陸は汚染されていない。大陸に島民達をいざなうことができれば…… 私は王家の禁を破り島から大陸に渡る航路を密かに探った。ある日、私のことを目障りだと思っ家臣達に投獄された。私はここで死ぬのだろう。これでいいのだ、私はこのような罰をずっと待っていた気がする。私は償い切れない罪と共に生きました。そして何もできなかった。こんな私が夢見ることを許されるなら、あなたに託したい。あなたなら……」

以下、ヨシヤの語りで展開する。(語りながら、そのシーンを動きで見せる)

ヨシヤ「目が覚めるとマナもカナンもいなかった。記憶にある研究所とは異なり老朽化が著しい。研究所にはエスペラント語で書かれた古代紙があった。そこにはカナンの半生が綴られていた。あのカナンが俺たちのために。隣には膨大な書物が。そこにはマナが生きた時代のことが詳細に記されていた。それを読んで理解した。カナンもマナももういない。その現実を受け入れられなくて俺は研究所を飛び出し、ただ、走った。なんだ、世界は再生しているじゃないか、島には人々の営みがあった。すべてが悪い夢なんじゃないか、頭の中で何度も自問自答した。無我夢中で走りついた先は浜辺だった。見上げると恐ろしいほどの輝きを持つ星空が無言で俺を攻めた。この星々は俺たちがあの時、この世から消してしまった無数の命達なのではないか。あの中にサクラもいるのか。満月がこの島で起きた悲劇を無言で追悼しているように見えた。マナ、カナン、俺はどうしたらいいんだ、俺はそのままだ意識を失った。目を覚ますと、青年・テルがいた。俺はこの青年から島の現状を教えてもなかった。短命だという不幸な現実を、神に選ばれた民だと解釈する人間の想像力の逞しさに驚きながらも、その理由の張本人が自分であることに胸が張り裂けそうだった。テルの祖先は神から稲作を授かったという。それは恐らくマナだろう。俺はテルに不思議な縁を感じた。もしかしたら、あの時サクラが生き残っていてその子孫がこのテルたちなんじゃないのかと想像した。そのテルが新島民達に差別されている。どうやら、新島民はカナンの子孫らしい。何故カナンの子孫達とサクラの子孫かも知れないもの達が争わなければならないのだ。テルやヒカリの想いをなんとか叶えてあげたいと思った俺は交換所で富を貯え、テル達の結婚まで見届けることができた。ちょうどその頃、俺は魔女と呼ばれる女性に出会った。彼女の一族はマナの子孫であり森に身を隠し研究所を守り続けてきたことを知った。俺が目覚めることを信じて。彼女たちは400年の間、大陸に渡る航路をずっと探し続けていた。そして、ついに航路が見つかったという。マナ、これが俺の使命なんだな。俺は貨幣を作り財を蓄え、移住のための船や食料を準備した。そのために多くの島民の暮らしを犠牲にしてしまった。俺はマナの子孫でもある大君にすべてを打ち明け島民の移住を申し出た。当初は乗り気だったものの権力を奪われるのではないかと警戒した大君は俺に兵を向けた。何故こうなってしまうのだ。大君を護衛するはずだった鉄器で俺はまたしても多くの命を奪ってしまった。俺はどれだけの島民を死に追いやるのだろうか。そんな時、テルから会いたいと。周りは皆、これは畏だという。確かにそうかも知れない。しかし、俺はあいつとの約束だけは果たしたかった。もし、テルの手にかかるのであれば後悔はない。マナ、カナン、俺は……」

○海岸

テル、ヨシヤ、魔女らがいる。

魔女 「テル、ヨシヤさんが抱えてきた苦しみがあなたにわかりますか」

テル 「じゃあ、……でも、そんな話信じられないわけないだろ！」

魔女 「認めるんです、この現実を。受け入れるんです、この世界を」

テル 「そんな……」

ヨシヤ 「テル、本当に、本当にすまない」

魔女 「ヨシヤさんだけが悪いんじゃないやありません。あの忌まわしき太陽が必要とされる時代があった。太陽を望んだ人々がいた。あなた達はその中で世界を救おうとした」

ヨシヤ 「あれを創ったのは俺なんだよ」

魔女 「あの事故からおよそ900年が経ちました。その間、島民の寿命は延びています。それでも島の汚染はまだ100年は続くでしょう。だからヨシヤさんは、カナンさん、マナさんの意思をついで、皆さんを大陸に移住させようとしていたのです」

テル 「ホントなのかよ」

魔女 「テル、あなたには何がみえますか」

テル 「ああ、オレはなんてことを。ヨシヤさん、許してください！ オレは、オレは！」

ヨシヤ 「……テル、お願いだ。大陸に渡ってくれないか」

テル 「でも……ここにはオレたちの土地がある。歴史がある。亡くなった人々の墓だつてある。それを捨てることなんてできないよ。この島はオレたちが生きてきた証なんだよ」

ヨシヤ 「その気持ちはわかる。だが、土地に魂を縛られないでほしい。土地じゃないんだよ、守るべきは人なんだよ」

テル 「ヨシヤさん」

ヨシヤ 「テル、新天地に種をまいてくれないか、マナがまいたように。希望という名の種を。その種は人がいれば必ず実る。お前ならきつと……」

テル 「ヨシヤさん」

魔女 「これ以上話すと」

ヨシヤ 「なあ……娘さんの名前……サクラはどうだ？」

テル 「サクラ、良い名前だね」

ヨシヤ 「ああ、………カナン、マナ。すまない、俺はもう……」

ヨシヤ、絶命する。

テル 「ヨシヤさん、ヨシヤさん！」

魔女 「ヨシヤさん」

テル 「ヨシヤさん！」

36

○テルの家。

テル、木を植えている。

テル 「(木を植えている) あらよつと。ふう、大きくなってな」

ヒカリ 「(子供もあやししながら) サクラちゃん、この木を覚えててね」

テル 「この家を、この土地を、この島を守っておくれよ」

タカ 「おおい、間もなく船がでちまうよ」

テル 「この3本の木が大きくなる頃、100年後、またこの島に帰ってくるからな」

ヒカリ 「ヨシヤさん、この島をよろしくお願いします」

テル 「ヨシヤさん……行ってくるね」

37

○海を走る船・100年後。

船上から島を見ている7人。

男① 「おい、みんな！ おばあちゃんの島が見えてきたぞ！」

女① 「うわー、あれがサクラおばあちゃんの島だ！」

男② 「あ、あの木！ 100年前のやつかな？」

女② 「あー、あれだよ。あれがカナンの木！」

女③ 「あ、あれはマナの木かな」

女④ 「その隣の一番大きいのがヨシヤの木よ」

男③ 「おい！ 3本の木！ 俺たちは、かえってきたよー！」

【完】